
ロリショタ！ ～私立萌葱学園萌えルート～

白代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリシヨタ！ ～私立萌葱学園萌えルート～

【Nコード】

N4779F

【作者名】

白代

【あらすじ】

サイトにてリメイク版公開中です 【<http://07die.blogspot.fc2.com/>】

プロローグ（前書き）

はじめまして。空蝉^{うつせみ} 彼方^{かなた}と申します。一応女です（笑）。
此処のサイトではまだ解らない事が多々ありまして……ですがそれなりに頑張ってみようかと思えます。

ブローグ

これは、二人のカップルを守る俺の話。

故に、カップルの話ではないのが残念は人は残念だなーと思うだろう。……だが。

そんな二人を見ているだけでも楽しいし、そんな二人からの使命を受けたのもこの世界で俺一人だけなんだ。ロリシヨタ、ロリシヨタ。

ロリとシヨタの二人を絶対に良い方向にもっていき、確実なデートプランとムードを設計するのも世界でたった一人。この俺だ。

目を離すと危険なロリガールとシヨタボーイが俺の元から独立する日は一体来るのだろうか……？

ロリシヨタ。

これは、二人のロリシヨタラブラブカップルプラス平凡男子高校生、明るくて少し有り得ないような、でも楽しい話という事になる。

「いつら、いつ自立すんのかな」

NEXT

世間で言つと、そういう風。

……ストーブは、温かいなあ……。

そんな事を思わせる、誰にでも訪れる肌寒い冬の最中に、俺は温かいストーブの前に居た。

寒いくせに中にいれば温かいと思わせてしまう今の時代が少し怖くなってくるくらいにこの教室のストーブは温かい。

イヤな事も勉強も、試験勉強も何もかもを捨てて良い心になった気分だ。

ふう、とため息をついて俺はストーブの前に手をかざす。

イヤな事。そうだなあ、俺のイヤな事というか少し鬱になるような原因といえば、『この二人』かもしれない。

「アオ。邪魔だ。温かい風が俺にだけ来ないぞ」

「ごめんねえ、蒼くん」

「……………」

甲高い声が「蒼」「蒼くん」などと呼ぶ。

俺の名前は蒼と書いて「そう」と読む。だが仲の良い奴だったり、そうだ。後ろにいるちっこい男子は俺の事をアオと呼ぶ。それでもってちっこい女子は俺の事をちゃんと蒼くんと実名で呼んでくれる。俺はその二人の要望通りにヨッコイショと温かくなった体を持ち上げて、立った。

途端に目に写ったのは、二人の姿。

男子のほうは、大神亜夕という。ちなみにあゆと読む。亜夕のあだ名はアユ。本人は嫌がっているのだが。俺は亜夕と呼んでいる。容姿を簡単に説明しよう。背は、俺よりも断然小さい。並んだったら亜夕は俺の肩くらいかな。髪は短くて、しっかりとっている。制服の着こなしもしっかりて正しいのだが、亜夕が小さいばかりに説明はダボダボだった。そして何より、この童顔。高校生とは思えないくらいに可愛い顔立ちをしているのだが、大人びていて生意気

そんな表情。実際、生意気なのが。

もう一人の少女……いや、女子は水上白亜という。みずかみ、はくあ。皆からはハクちゃんだの、ハクにやをだの呼ばれている。俺と亜夕は普通に白亜。

コイツもまた容姿がある意味問題なのだ。

背は、亜夕より小さい。そして、細い髪を高い所で二つに結っている。ツインテールって言うのかな。そして、亜夕同様この童顔。可愛らしくてまだ小学生の雰囲気がある。可愛い事この上ない。制服は？ と聞かれると誰もがこう言うだろう。「袖が……」と。ブレザーはデカいのか、袖はブラブラしていた。スカートは何回か折っている。巻いているって言うのか？

二人ともとても可愛い。そんな可愛い二人を、一部世間ではこう言うだろう。

『ロリとシヨタ』と。

早速始動の強攻突破

ロリとシヨタ。

これこそ正にストライクゾーン！ と考える奴はこの世に沢山いると思う。いや、沢山いる。

そんな萌えドストライクな可愛らしい二人に俺はときめいた事なんてない。『ドキン』もなければ『ドキュン』もない。強いて言えば、普通に可愛いカップルだなーって事くらいかな。誰もがこの二人を見て可愛いと思うだろう。

さすがに一目惚れとか萌えドストライクなんてのはないが、可愛いとは思っても思うと思う。感情がしっかりした奴ならな。ま、可愛いだろう。

そんな二人のお守り役が俺なワケで、外出する二人の後ろにガードマンのようなストーカーのような状態でついていく俺なのだが、やはり二人は校内を歩いてみても目立つ。狭い廊下の中でもとても目立つのだ。

女子の先輩方なんかは亜夕にベタ惚れ。隠れファンクラブってのが校長や職員達に内緒で作られているらしい。参加費は無料。

白亜は男子にも人気だ。男子なんかは写真部から彼女の写真を撮ってもらったりしている。勿論彼女本人の許可ありで。白亜は「白亜もモデルさんだねー」と嫌がっている様子は全く見せずに悠々とフラッシュを浴びている。

ファンクラブもできているらしい。なんでも、『白亜ちゃん愛で同盟』とか。亜夕は、『シヨタ亜夕くんを愛でる会』だとか。プラスチック製会員カードを今なら無料らしい。勿論入会した人には、だ。

そんな事、亜夕は全く興味なさそうなのだが。白亜はちよっぴり嬉しそうな照れくさいような仕草を以前見せていた。

「……腹が減ったなあ。そろそろパンとか買いに行かないと、昼飯

の時間だ」

「白亜、アユと一緒に食べるのー」

「じゃあ二人とも、下行って何か買いに行きますか」

「賛成賛成賛成ー！ 白亜ねえ、クリームパンクリームパン！」

「オレはクリームパン嫌いだからな」

「えー」

白亜はいつも亜タと一緒に物が食べたいらしく、いつもいつも亜タが買った物を食べている。

昨日確か亜タはメロンパンで、白亜もメロンパンだったっけ。俺はちなみに二人と全然違うサンドイッチだった。野菜が豊富に使われた、健康に良さそうなサンドイッチ。

白亜も亜タも温かいストーブの前から立ち上がり、二人揃って廊下にでる。

そのチンマリとした二人に付いていく、二人に比べたらデカいのが俺。

かろうじて一階の食堂についた。

二人はやはり背が小さいので、階段を上り下りするのも多少疲れてしまうらしい。

だがそれでも楽しく会話して階段を降りていた。

階段を降りてすぐ目目前に見えるのが、窓が大きな美しいガラスの食堂。ガラス張りといってもいいほどに解放感あり、差し込む太陽の光は柔らかい。……雨天だったらこの食堂は美しく見えないのだが。でも、食堂は綺麗だ。

だが。今日は何故かザワザワとした空気が押し込んでいた。

白亜も亜タも少ししかめっ面をしながらその食堂に足を踏み入れる。

確か。……確か今日は、奇数の月の木曜日だ。という事は、生徒達からとても人気なメロンパンが売っている特別な日である。

そのメロンパンというのは奇数の月の木曜日の、食堂のおばさん太達が期限の良い時だけ作られるという伝説のメロンパン。

そのメロンパンというのがこれもまた味が最高で、濃厚なメロンの味が際立ち生徒を虜にするという。そんなメロンパン俺も食べてみたいものだ。

そんなパンを求め、生徒達が欲しい欲しいと一点に集まりギユウギユウと激しいメロンパンの争いが続いている。

「いいなー。白亜もあのメロンパン食べてみたい」

「実を言うと、オレも」

白亜と亜タがグウウとお腹を鳴らせて、メロンパンを求める野獣達を見ながら呟いた。

「俺も食べたいけど、もう……あの大群じゃ無理だ」

白亜は指を加えて野獣達の光景を見ている。高い所で結われたツインテールが僅かに揺れた。まるで、俺に「取りにいけ」とでも言うっているかのような微妙な動作。

無理に決まってる。あんな野獣達の大群に攻めたら怪我するぞ！それにもうきつとメロンパンは残り少ない。

「アオ。お前の指名、忘れていないよな？」

「……は？ む、無茶言うな！ メロンパンは残り少な……」

「いいからさっさと行って伝説のメロンパンを二つ持って来い！命令！」

「お、俺のおごり？！ しかも二つつて？！」

亜タに背中をドンと力強く押された。シヨタが出すような力とは思えないくらい馬鹿力のせいで俺は大群に飛ぶように入って行ってしまった。

「う、うわああああああああっ？！」

入るとそこはパラダイス！ ではなく、本当に地獄だ。

周りは先輩が多くて、一年の俺はヘコヘコしなければいけない気分。それに何よりこの人の多さ！ 押しつぶされて死んでしまわないかとても心配だ。

俺の暴走・メロンパン

うつつ……人に押しつぶされて、し、し、しし、死ぬ……。

死ぬだろ！ コレ！

亜タの奴は自分と白亜の事しか考えてない。押しつぶされるように命令しやがって。まあ、メロンパンを取ってこいアンド買ってこいというのが命令なのだが。この仕打ちは酷すぎて俺の息は既にゼエゼエしている。

「覚えてろよ、ガキ！」と思いつつ潰されながら手を伸ばして辛うじて歩き続けると、やっと人混みのど真ん中に入り込めたらしい。そのせいか、周りにはうるさい。

金切り声をあげて皆必死でメロンパンを奪い合っていた。

くそ、こんな状態の中からメロンパンを二つ取るのか。

あれ、二つ？ そういえば亜タはメロンパンを二つ取ってこいと言っていた。……そうか、アイツは俺の事も考えない憎らしい酷い奴なのか。

白亜と亜タのメロンパンで必死だったのか、自分の分をいつの間にか忘れていたのだ。

仕方がない。俺は普通のパンで我慢するか。

目の前のメロンパンやパンが置かれている台を見ると、残りのメロンパンは後三つ。

皆人混みで奪い合っているからメロンパンも取りにくい状況に置かれているのだ。だから単独でしかも絶好のポイントというド真ん中に居る俺は、ここから暴れて大ジャンプでもしてみればお目当てのメロンパン二つ取れる可能性大有りなのだ。

蒼よ。大ジャンプする用意はいいか？ ……オーケー。

脳裏でもう一人の自分が返答しているような気がして、俺は大ジャンプしてメロンパンを一気に二つ取ってしまおうという世にもくだらない作戦を実行しようとする。

運動神経というものが何故か優れているという俺にはあんな距離までのジャンプ朝飯前なんだよ。

足を踏み出して。

一。

二いの。

三。

一瞬この世界がいつまでも止まっているような気がしたが、すぐに時の経過は開始し俺は見事に人々の横を横切ってジャンプしていた。

そのジャンプの影響で髪がフワフワサラサラと揺れている。

時が進むのが……遅い。

俺はスロー最盛されている映像のような気分に取り囲まれ、徐々に近づいてきた台の上のメロンパンに大きく手を飛ばした。

届け。届け。届け！ そう思った刹那。

時間の進み具合がいつものスピードに一気に変わり、俺はメロンパンを二つ掴むと同時にズザアアアアと大きく音をたててメロンパンの台に見事着地した！

「取った。取った！ やったぜ、亜夕、白亜！」と思いつつ周りの元々居た人ばかりを見ると、皆視線は冷たい氷のように俺に向けられていた。

いや、ね？　せめて拍手でいいですよね？

まあそれはさておき取ったメロンパンを誇らしげに見つめて抱きかかえるようにしてメロンパンを持ち、台をスッと降りて亜夕と白亜の元へ行こうとした。

「亜夕！　白亜！」

俺は満面の笑みで二人を見た。
が。

チンマリとした二人とは対照的にデカイ先輩たちが二人を囲んで、

「亜タくん可愛いねー。このメロンパン、お姉さん達があげちゃうよっ」

「は、白亜たん可愛いなあ。俺達の分もタダであげるよ……！」
なんだ。この光景は。

囲まれて、二人はそれぞれ二つずつメロンパンをもらい、俺同様そのパンを抱えていた。白亜は嬉しそうに、亜タは少しツンデレっぽく「べ、別に欲しいなんか言っていないんだからな！」なんて言うてみたり。

二人の為に満面の笑みが一気に固まって心の中に悲しさがしこりになるのがよおーくわかった。

あ、あははは……ははははは……。

「アオ、すまない。二つも貰ってしまった。もうそのメロンパンはお前にやるからとっと金払ってこい」

「ごめんねえ、蒼くん」

「へへへへへへへ、いいよ、もう……」

メロンパン一つで二百円というこの高さ。メロンパン二つイコール合計四百円。チャリーン。……トホホ。頑張ってジャンプして、ほぼ命かけてた俺がバカだったよ。

四百円は無駄に消えていった。

それにしても、このデカイメロンパン一人で二つも食うのかよ、俺。

「うわあい！ このメロンパン大きいねー」

白亜がデカイメロンパンのビニールを開けながらそう言った。

その白亜の動作に続いて亜タもビニールをビリビリと開け、無表情で少しメロンパンを見て嬉しそうにしている。

俺の頑張った意味、なし。

「まあ、オレは別に欲しくないと言ったのに周りの女どもがメロンパンをやるやるって。だから仕方なくもらってやったただけだぞ。悪

く思っな」

「もうその話は終わりにしようってかんじなんですけど……」
すると白亜が空気を読まずに、

「ああーっ！ アユのメロンパンのほうが大きい。交換して、交換」

「しょうがないなあ白亜は。ほら」

この話は終わりにしようと言ったのは俺だが、呆気なく無視しているかのように相手にメロンパンを交換をし始める亜タを見るとさすがに心が痛い。

それにしても久しぶりにあんなジャンプしたような気がするぞ。最近体育の授業以外運動していないからな。少しは今日みたいな日に備えて運動するとか、な。

亜タの白亜の変な願望によってまた頑張る日が来るかもしれないし、体がなまっているなんてのは高校一年生の男子として恥ずかしい事だ。

チッコい亜タと白亜が大きなメロンパンにかぶりついているのは可愛いなあと思った。

この見た目が幼い二人のカップルを見てると癒される。フウと幸せなため息が出そうな程なのだ。幸せなため息ってどんなのかわかるよな？

メロンパンを食べる気力もない俺の目を確実に背けて白亜のもうを向きながら、亜タはモグモグと口を可愛らしく動かして言った。

「白亜。今日のデートの事だけど、生徒会があるから……」

目の前でデートの話をされる事なんか慣れました。

ところで、亜タは生徒会に入っている。さすがに生徒会長ではないのだが、やはり周りの大勢の生徒から「ちびっ子生徒会」として人気を集めていた。これが、亜タは男子も女子にも人気があるものだから恐ろしい。

「ええ、生徒会？！ ウソ、だってこのあいだ白亜がデートしたいって言ったら放課後デートって言ったのアユだもん！」

「生徒会の仕事は生徒会の仕事だ」

ごめん。意味がわからない。

「アユのバカア！ 生徒会のバカああ！」

「と、とりあえず二人共。口に物を入れている時は喋っちゃいけません。」

「蒼くんは黙ってて」

「は、はい……」

いつも笑顔の少女に突然ギロリと睨まれたら黙っているしかない。この気持ち、理解できる奴は多いはずだ。

そこでハツと気づく。

もしかコレは、絶対あつてはいけないカップル喧嘩？！

そう思っていると亜夕が隣で食べかけのメロンパンをビニールに入れて、

「行くぞ」

「……………」

亜夕はそのビニールを持ちながら教室に行く為の廊下に出始めた。そんな彼を見て白亜もビニールに食べかけのメロンパンを入れ、俺に無理矢理持たせる。二人共残りの一個は明日食べるつもりだろうか。

すると白亜が俺を上目遣いで見てきた。

「は、白亜？」

「お願い。蒼くんは私達のためにいるんでしょう？ 協力してえ？」

「む、むう」

「お願いお願いっ！」

上目遣いで可愛らしい視線を送られ、しかもおねだりされたら俺だつてかなわない。

「わ、わかったよ……それが使命だからな」

そう言つてやると、白亜は嬉しそうになつこりと微笑んでツインテールをピヨピヨンさせながら寒い廊下を先に駆けて行った。短めのスカートもピヨピヨコピヨコ揺れる。

協力してと言われても何すりゃいいんだ？

最強カップルの最強喧嘩

食事の後、授業は終了したので俺は帰りの学活の前に先生の指示通り通学用バックに重たい教科書らを押し込み、担任の先生から明日の持ち物などを聞きつつ連絡用ノートにそれらを書き込んでいった。

『協力して?』というさっきの白亜の台詞がまだ頭から離れない。乾ききったボンドのように剥がれない代物となっている。

協力してなんて言われても、今日亜夕の奴は生徒会の仕事があるんだ。いくらなんでもデートしたいからって無理に決まってるぞ。

……まあ、このチビカップルを良い方向に持つていくのが俺の役目だけだ。さすがに無理だ。

白亜と亜夕のデートはどうなるのか。そして、二人の喧嘩らしい物の行方は? ついつい気になってしまいふと後ろの席のほうを向いた。

ちなみに俺は黒板というなのチョークのカスで汚れた物のだ真ん中に居るわけで、白亜と亜夕は一番後ろの席だから首を曲げるのが痛い。

それはさておき。

ツインテールのオチビさん、白亜はムスツシたしかめっ面で帰りの学活用のノートに何か落書きをしていた。自分のイライラを学活のノートにぶつけているがために落書きをしているのだろう。一方亜夕は何食わぬ顔……何食わぬ童顔で普通にダラダラと学活のノートに先生の言われた事を書いていた。さすが生徒会所属。しっかりビッチリ書き込んでいるな。

いつもの二人の帰りの学活はこのような物だった。

まず、白亜が亜夕にウインク。そして亜夕は照れる。まあ一部世間で言うツンデレ仕草を見せる。その次。白亜が何かパントタイムで亜夕と話そうとする。亜夕もそれに便乗してパントタイムで話す。

……と、担任が来て怒られるってわけだな。

ちなみに白亜と亜夕は一番後ろの列の席で、亜夕の右に別の生徒がいてその生徒の隣に白亜がいる。またまたちなみに白亜はベストポジションとも言えよう窓側にいる。

というわけで、今日は二人のパントマイムはなかったし、今くらいの時間帯ならそろそろ担任から拳骨をくらってもいい時間だったが、今日は二人とも顔を合わせる事なく帰りの学活をスルーするかのようによつて終了した。

この二人、本当に大丈夫なのだろうか。

まあ、「大丈夫か？」と思い始めるのなら俺は二人の為に全てを尽くさなければいけない。食事の時間に消えてしまった二人の放課後デートを復活させてみようじゃないか。亜夕だってデートしたい筈だ。「中野くん。中野くん。先生のお話聞いていたかな？」

女性担任の駒形先生の高い声が耳に響いた。

「あ、すみません」

謝ってはいいたものの明日の持ち物や連絡より亜夕と白亜の放課後デートのほうが大切だったし、何より最高のデートプランをたてなければいけない。今は明日の事より今日の事。もっと詳しく言えば今日の放課後の事が大切なのだ。

学活用に何か書き込んだフリをしてから、頭の中でデートプランを必死に考えた。

だが。

ああ、そうか。今更気づいたぞ。

恋愛経験が全くの無と言えるこの俺がいくら必死こいて二人の最高の放課後デートを作り上げてやろうと思っても、無理な話なのだ。女子に興味が全くない俺が女の子はどのような物が喜ぶかなんてわからないし女子の気持ちになんてなれない。むしろ彼女を持つ彼氏の気持ちなんて味わった事も深く考えた事もない。それはさておきこのチビカップルの好む物、好むデートなんて解らない。

何度か二人はデートをしているが、俺はデートについて協力した

事が一切なかった。協力といえばジュースやクレープを全て俺の自腹で買ってやったという事くらいだけだろうか。

何故デートプランをたてた事がなかったかというところ、亜夕は俺の恋愛経験の無さを知っていたから最初からデートプランについては俺に任せなかったのだ。

亜夕はやはりそのシヨタルックスシヨタという属性でモテているため、デートプランなんて朝飯前なのだ。……じゃあ俺は？ どうすんの？

「……………」

すまん白亜。その放課後デート、たつた今また消滅したかもしれない。

先生から清掃なしの連絡と帰宅許可をもらった後、亜夕は鞆片手に生徒会議室へと向かってしまった。白亜への挨拶なしで。

やはり亜夕も少し悔しかったのかな。約束した事を守れなかったのが悔しかったのかあるいは男として恥ずかしかったのか。まあ俺としての意見では生徒会なら仕方ないかな、と。

だがやはり白亜は女子なのでそんな理由通用しないのだ。女って奴はわがままだなあ。

「あ、蒼くん。一緒に帰ろう？」

「おお」

そんな思考を脳いっぱいに広げている気分していると、白亜がひまわりのような満面の笑みでそう言うてきた。彼女は背が小さいために、俺はいつも見下ろして返事をするのだ。

白亜は相変わらず可愛らしい明るい笑顔を見せてくれていたのだが、裏には少し悲しそうな表情もある気がした。

白亜が、夕焼けになりかてた空の下をピョコピョコと歩く。それと隣に付きそうように俺も歩いた。亜夕なしの俺達での帰宅は久しぶりかもしれない。

白亜がツインテールを揺らしてつぶらな瞳で俺を見て、

「あのね、白亜ね。本当はちょっぴり反省してるの」

「……そうなのか」

「うん。だってアユが生徒会のお仕事があるのは仕方がないのに白亜はアユにバカって言っちゃって。コレって、白亜のお馬鹿なワガママだよな。白亜のワガママのせいでアユを怒らせちゃったし。ほんと、白亜ってバカ。バカ。バカ、バカバカ！」

ああ、やはり反省しているのか。と思い白亜の小柄な体を見下ろすと白亜の瞳がキラリと光った気がした。光ったと思うが早いがその黒真珠のような大きな瞳は少し歪み、ポロポロと透明な雫が乾いた地面につたった。

「もう……ヤダヤダ。白亜はどうせバカだもん。ふえ、ええええええええええええええええええええええ！」

とうとう大声をあげて泣き出してしまった。誰か白亜を止めてくれ。

「は、白亜！ やっぱり学校の門へ戻ろう！」

なんでこんな事を思ったんだ、俺。

この俺も予想外だった台詞を聞き、驚いたように口を少しポカんと開けて白亜は涙を止めた。

後、更に俺の脳裏に浮かんだ覚えのない行動をした。……気付いたら白亜の細くて腕を掴んで来た道を逆戻りし、学校へ向かったのだ。

嗚呼、神よ。こんな俺に幸あれ。

「蒼くん！？ どうしたの……?!」

ツインテールをピョンピョン揺らさせて意味不明の行動をする俺に白亜は頑張っつついてくる。

仲直りすれば二人の父親

亜夕を待つ為に、俺達は門の前でたたずむ事にした。

まあ、何故俺がこのような行動をしたのかも解らないでいるし、俺は一体この未知の頭脳の中で何を考えてからこの行動に走ったのか解らない。

人間は、全くの未知です。

でも恐らく俺のさっきの行動は白亜の為の行動だろうと多少は考える事ができる。

白亜はそれなりに自分のワガママさを反省していたはしていたし、きっと彼女は自分の彼氏であるシヨタ亜夕に謝りたいと思っているかもしれないし。だから俺は自分の使命的ミツシヨンの運命を辿る為に白亜の為に走ったのだ。

もちろん、亜夕の為でもある。

亜夕だって反省しているかもしれない。……まあ男の俺から言わせてもらうのならぶっちゃけ亜夕に反省すべき所は無いのだが、ちゃんと対応を取るべきだったとか、謝るべきだったとかは思っているだろう。……多分、な。強いていえば、この喧嘩らしい状態は二人の幼さが故に起きた状態なのかもしれない。

体や年が俺と同じ大人に近い時だとしても、二人は自分達の見たいやその童顔のようにまだまだ子供なのだ。まったく。放っておけないよな。

でも、俺にとってみればそんなところが二人の可愛いところなのだろうか。

周りの言う『ロリ』『シヨタ』とか、外見にとらわれた見方ではなく俺はまだまだ心の面でも未熟で幼い二人が好きだ。二人と一緒に居るととても楽しいし、あきた日なんてないのかも。亜夕は意地悪ながらも俺に接してくれたし、同じ年なのに背が断然デカくて力もある俺を信用してくれた。人気者のくせにたまに人見知りす

る白亜は自分よりもデカくて強そうなかんじの俺を慕ってくれ、仲良くしてくれた。

そんな二人だから。

だから俺は亜夕と白亜から受けた『使命』を果たしたい。

そんな二人がドンドン悪い方向に行くなんてたとえ神が許そうとも俺が許さねーよ。二人が喧嘩するとか、別れるって事になるのも俺は見過ごせない。二人を守り、二人の幸せな姿をいつまでも永遠に見ていたいというのが俺の強い願望。

……ただこの願望には欠点があり、それは何かと言うと二人に一直線になると『自分は恋愛経験なしのまま』という事だった。

「……………」

無言になり心の中で微かに苦笑。

ごめん。二人がどうだろうとさすがに彼女または妻ができないのはちよつと、な。

「蒼くん。アユ、来るかなあ？」

少し寂しそうに白亜が聞いてきた。僅かに首を傾げ、つぶらな瞳は俺に向けられている。二つの長いしっぽのように見えるツインテールが揺れた。

否定はしない。可愛い。「来ない事なんてないだろ。学校に泊まるわけじゃないんだから。亜夕のはたかが生徒会だろ？　あまり心配しなくてもいいよ。ただ、今日は少し長引いているのかもな」

時計を見ると、いつもの生徒会が終わる時間を過ぎていた。もうすぐで五時半になる。

冬は日が沈むのが早いためにもうすぐで真っ暗になりそうなかんじ。夕日は沈んで夜空へ移り変わる狭間に俺達はあるのかもしれない。その微妙な夕日のオレンジ色の光は、白亜の白くて可愛らしい頬を少しオレンジ色に染めた。うん、絵になっているぞ。

しばらく白亜の横顔を上から見下ろすようにして見ていると、後ろから何やらやけにチッコい人影が見えた。……亜夕だ。

「あ、アユ！」

白亜が亜夕に向かつてそう言うと、亜夕は少し照れたように頬を赤く染め、プイツと後ろにまた向き直ってしまった。なんせ亜夕が子供っぽく見えるわけだから、その仕草は可愛らしい。

そんなツンデレ亜夕に向かつてテトテトと白亜は歩き、

「ごめんなさい、アユ。白亜、ワガママ言っちゃって怒らせて。生徒会なら仕方ないよね？ それなのに白亜ったら……本当にごめんなさいっ」

両手を前で重ねて頭を下げる白亜を見て亜夕は動揺する。人差し指をたてて照れくさそうに頬を搔いてから亜夕も反省したように首を下に傾けて頭を下げる白亜を見た。珍しく白亜は真剣だ。

目をギュツと瞑って顔を赤くし、頭を下げ続ける白亜。すると、

「ううん。オレも悪かったよ。実を言うと生徒会が終わってから帰ろうとして此処に来たら、お前達が居てさ。それでしばらく此処でお前達の様子を見てたんだ」

ストーカーかよ。ていうかよく気配消せたな。

白亜はソレを聞くと頭をフイっと上げた。

「いつから見てたんだ？」

「……ああ、『蒼くん、アユ、来るかなあ？』らへんかな。ごめん、オレもごめんっ！ 白亜との約束生徒会で潰れちゃって少し悔しくて。……ごめんね」

おお、コイツも珍しく謝っているじゃないか。

亜夕は照れくさそうに微笑んで、白亜の小さな冷たい手をとった。白亜も顔を赤らめる。

「……じゃあ、そうだな。二人共。今日は帰宅デートっつー事で、どうですか？」 そう言うと、二人は揃って、

「「うん！」」 もう本当の子供だな。

すっかり黒くなったような、まだ赤い夕日の色が混じったようなそんな色に変えられたようないつもの下り坂を歩きでくだっていくこの坂は登校する時は登り坂という地獄に変化するが、帰りはラクチンだ。スルスルと下りれる。

そんな坂を二人は仲良く手を繋いで下り、その二人の後ろを俺がついていくという形だ。

目の前の二人は更に仲良く一緒に校歌まで歌いだした。ムードないぞ。せめて流行りの歌にしたらどうだ？ ……まあでもその歌っている歌が校歌というシチュエーションは、こんな小さな二人にしかできないシチュエーションだろう。

周りの木々もすっかり美しい紅葉を見せ、二人の「仲直り」を祝福しているかのようにザワザワと音を鳴らせていた。

冷たい風が冬を余計寒く感じさせられるのだが二人のおかげで結構俺は温かい。気分的にな。

「そうだ。明日またメロンパン食べようねー」

「そっか。オレのもアオのも白亜のもまだ残っているんだっけ」
アオって呼ぶのはやめろ。アオじゃない。

「明日もメロン！ メロンメロンメロン」
白亜はオリジナルソングを歌いだした。

歌いだしたが早い、周りの電灯がパツと次々についていき、空も一気に黒くなってもうさっきのオレンジ色は無くなった。もう夜だな。

「ホラ二人共。もう暗いぞ。歌ってないで子供は早く帰る帰る」

「子供じゃないもん。蒼くんと同じ年だよお」

……まあ、否定はしない。

ちなみに余談となるが、途中からの別れ道で俺達は別れる。俺は左の道、亜夕と白亜グループは右を。亜夕と白亜の家はどうやらお向かいさんらしく、幼い頃から親しいらしい。

ほほー、どうりでこんなに仲の良いカップルができるわけだ。そんな事を思っていると、もう別れ道に突入していた。

白亜は亜夕と手を繋いでいないほうの手を上に乗けて離れかけた俺にその手をブンブンと振り、

「じゃあね蒼くん。また明日あ！」

「遅刻するなよ。朝からお前をこき使ったからな」

「ハハハ……じゃあな……！」

俺も軽く手を振り、左の道へ進んだ。

まったく。明日もこき使ったと？ まあいいんだがさすがに手加減してくれないのかな。

家につくと、一気に自分の周りが静かになったような気がした。

まるで俺は二人の父親気分だ。

やっと帰宅だよ……。

記憶の彼方から

俺はその後夕飯食ったり明日の予習したり、歯磨いて……ベッドに入った。ベッドに身を任せていると、一気に下のシーツのほうに疲れがドツと吸い込まれたような気がした。俺、疲れてんのかな。冬のベッドは毛布さえも冷たくて最初はキンキンに目が覚めてしまふのだが、すぐに俺の体温で温かくなる事だろう。それまで今日の振り替えでもしていればいい。なあに、すぐに眠くなって最初のには意識が飛ぶさ。

今日も亜々と白亜に絡まれ他のいうか、世にもくだらない喧嘩を仲直りに導いたというか。くだらない喧嘩というよりはお子ちゃまの喧嘩だろうか。

まあ、幸せエンディング方面に向かってよかったと思う。このデパート事件はハッピーエンドで終わったのだ。パチパチパチパチ。って、俺こそくだらない男だよな。

上の、白くて黒ずんでいるとも言える天井を見ながら多々妄想に励む俺。表情に出たりしていないかな？俺明らか怪しいよな。

そんな事を思いながらふと、思った。

そつえば俺って、なんで今二人のそばに居るんだっけ。

そうだ。俺がまだ高校に入学したての時だった。

友達もできそうにねーし、何より前の中学の奴らと離れたし、情けない事にやりたい部活もないから普通より少しレベルが高いというこの高校を選択した。勿論合格。初めてのホームルームでの自己紹介では暗く終わらせ見事失敗。当然俺の好感度はダウン。何より普通の中の普通の普通の普通な俺は目立たない。周りで女子がキャピキャピ言っているのも男子のプロレスゴッコも正直迷惑だった。

だがその前に。自己紹介の時にやけに印象に残る二人がいた。

「大神亜夕。趣味、特になし。好物は辛い物より甘い物。得意教科はまあ想像に任せる。生徒会に立候補する予定。その時はまあ投票よろしく」

ザワ……ザワ……と、皆がざわめき始めた。

自己紹介がおかしいというわけではない。

おかしいのは……、

『大神亜夕』の見た目だった。

俺よりもとても小さい体。その体つきからはとても男子とは思えないようなオーラを出している。少しデカそうな制服に、まだ声変わり手前か声変わりしたての多少高い声否定はしない。男のん俺でも思う。……可愛い。否定した奴は殴るからなと真っ先に思った。

周りもどうやら亜夕の事を可愛いと思ったらしい。

「何、あの子。シヨタ？」「可愛いー」「手えちっちゃいねえー」

「制服デカいんじゃないの？」「男の俺でも惚れそうだぜ」「絶対私投票するから！」「皆ザワザワ、ザワザワ。」

「静かに静かにー！ 皆、静かにー！」と、まだ若い女性の先生は教卓の前で声を張り上げた。

初めて亜夕を見て亜夕に驚き、俺は口をポカンと開けたまま亜夕の姿を見た。

元々であろう、仏頂面。口はへの字にキュツと結ばれている。小さな体には高校用の机と椅子が合っていないのか足は床に届く事なくぶらぶらとしている。

コイツ、本当のシヨタだ。とその時俺は思った。

次の奴もこれがまたルックスが色々な意味で問題だった。

「はい、じゃあ次の人」と先生が言つとその第二の『問題の奴』が元気よく立ち上がった。

「はいはい、水川白亜ですつ。趣味はあアユとのデートでえ、あ、たまにお兄ちゃんともお散歩行くよ。得意教科は国語です！ 皆、よろしくね」

「は、白亜たん……！」「あ、あの子可愛くない？」「妹系って奴？」「白亜さんは俺の嫁だああああああ！」「女の子よりも女の子らしい……」こちらもまたザワザワとし始めた。「俺の嫁」発言はよそうぜ。

白亜の第一印象。

ロリ。妹系（実際に兄貴がいるらしいな）。短いスカートから見える白くて細い足は可愛らしく、おまけに背も小さい。それに細い髪を上の方で二つに分けたツインテールはいかにも妹系の雰囲気を出していた。

その時初めて俺は「大神亜夕の彼女か」と知ったのだ。

白亜は自己紹介を終わらせて満足げに席についた。

周りでハアハアと息を荒くしている男子が気持ち悪い事この上ない。この水川白亜という人物はズバリ「ロリ」なのかな。と、俺はこの当時思った。亜夕同様、可愛い。

という事でこの初めてのホームルームでの自己紹介にてアイドルが二人誕生したという事は学校中の伝説となり、瞬く間に二人はクラス内だけでなく学校中のアイドルになったのだ。

そんな自己紹介も、初めての高校での勉強、言わば授業も終了して休み時間になった。休み時間と言えば周りの奴らがプロレスゴッコだの、噂流しだの、色々騒ぐ時間だ。

やっぱりこの時俺は一人だったので、自らプロレスゴッコの仲間入り申請するわけでもなく、かと言って女子に紛てキャピキャピと話す事も出来ない。

仕方なく、俺は一人で休み時間を堪能しようと机に突っ伏して寝る事を選択した。……今考えたらこんな生活ありえない。すると寝ようとする俺の行動を妨げるかのように亜夕が俺のそばへ寄ってきて、手を腰にあてていい放った言葉がある。嗚呼、この時の事を俺は忘れた事はない。

「な、なんだよ。人が寝るって時に……アイドルさんや。他の所へ

「お行き」

俺が気だるそうにふざけてそう言うのと、亜夕は少し見下ろすようにして、

「ふざけるな。……いいか、オレの言う事をよく聞け。お前は一人だ。この学校に慣れていなければクラスメートにも慣れていない」

「……それがどうしたんだよ」

「お前への使命だ。オレと白亜に全面協力しろ」

「は、はい？」

「そうかわかった。引き受けてくれるんだな」

「いや、まだ何も言っていないんですが。」

「使命は簡単だ。まだ体が小さいオレ達を安全な方向へ持って行き、オレと白亜というカッブルを全力でサポートする。やるのか？ やらないのか！」

「あちゃー。ここで「無理」っていうとスゲー怒られそうだな。いや、もう実際なんか知らねーけど怒っている口調だし。今は亜夕に従ったほうがいいのかもしれない。」

「やるのか？ というかやれ！」

「は、は、はいいいいいい！」

「……わかった。お前、蒼って書いて『そう』って読むんだったよな」

自己紹介、聞いていてくれたのか。

「その読み方、却下。見事に普通で見事にダサい読み方だ。だからオレはお前の事を今日から『アオ』と呼ぼう。素敵なあだなだな。よかったな、アオ。ハハハハハハ！」

ひとしきり偉そうに笑うと、亜夕はそのまま廊下に出ていってしまった。サイズが合わないデカイ上履きのせいか、亜夕の足跡は見事に「パタテトパタテト」だった。

自己紹介での仏頂面が嘘だったかのように微笑んでご機嫌そうに廊下を出たのである。

そんな亜夕を見て、俺はまた寝直そうと前を向くと、目の前には

アイドルちゃんの白亜がいた。

「うわあっ?!」

「あ、ごめんなさい。蒼くん」

しっかり『そうくん』と呼んでくれた。……それよか、白亜の童顔で可愛い顔は近い。

白亜もソレに気づいたのか赤面させて「ごめんなさい、ごめんなさい」と言ってから顔を離れさせる。

「アユは気にしないで。アレもアユの優しさなんだよ? 一人だった蒼くんに話したがっていたし。でもアユってうまく人と話せなかったりするからああやって偉そうになっちゃったり。あ、白亜は白亜って言っただ」

知ってます。

「よろしくねっ、蒼くん。……これからも、白亜とアユを守ってねえ……?」

白亜は、上目遣いで俺を見つめて両手を合わせておねだりしてきた。くそっ、お兄ちゃん気分になってくるじゃないか!

ここまでおねだりされたなら返事は勿論、

「……了解……」

だ。自分の顔が一気に赤くなるのがわかった。

「そっ、よかった! じゃあまた後でね」

ツインテールを揺らして後ろを向いたが、白亜はピタリと止まりまた俺のほうへ向きなおして、

「それとアユが、これから行われる三人組男女混合体育の授業お前をグループに入れたからな。だって! そっちでもよろしくね。いやって言っても白亜が許さないもんっ」

そう言ってまた亜夕を追うかのように廊下に出た。

可愛い。可愛すぎる。

と、亜夕と白亜に初めて会った時と初めて会話した時の事を追想して俺は懐かしい気分浸った。

白い天井が更に優しく懐かしい気分浸らせてくれる。

そういえば、白亜って本当に兄貴がいるんだよなあ。どおりであんなロリ系になるわけだ。ああ、納得。

ちよつとまで。男女混合体育の授業つて、またやる事になったよな？ 確か先生が明日からと言っていた。まだ耳に残っている。

そうか。それなら明日の体育も二人を全面サポートしなきゃな。

睡魔の野郎が襲ってきたので、俺は電気を消して眠りについた。

白亜・跳び箱挑戦タイム

「い……痛っ……馬鹿！　いくらなんでも押しすぎだ！」

「亜夕、無茶言うな。準備運動はな、大切なんだよ。だからいくら固い人でも背中を押さないと、」

「あっ痛たたたたたたたたたた！」

ついに男女混合体育の授業の日がきてしまった。どうせ亜夕と白亜と俺といういつものメンバーだろうと思ってうたのだがこのメンバーでは息が合わない。

亜夕のせいにはしたくないのだが、悪い。亜夕、お前体固い。きつと運動もしないで俺に頼っているからだ。要するに人任せって事。冬なので皆ジャージを着ている。女子は赤、男子は紺。ちなみに此処は体育館。

「アユ、頑張れー。ファイトファイトーっ」

「うぐぐぐぐ……」

今は柔軟の時間だ。今は亜夕の小さい背中を遠慮なくグイグイと押しているが後できつと白亜の小さい背中も押さなければいけない事になるだろう。ただでたさえ細い体をしているのに、俺の力を少しでも強くしたら……いや、考えない事にしておこうではないか。一通りグイグイと亜夕の背中を押して、「さて、次は白亜だな」と思いチロリと白亜を見ると彼女は怖がった舞台のほうへ逃げようとしている真っ最中だった。そんな白亜のジャージを慌てて掴み、連れ戻す。

どうやら白亜も運動や体育が苦手なようだ。

「さ、白亜。背中を押される番たぞ」

「いやあ！　白亜どうせ背中伸びないもの！」

『柔らかくない』という表現のほうが正しくないか？

「いやいやいやー！ 白亜体育苦手なんだもん」

半泣き状態でだたをこねる。いやあ、あまりそんなに暴れられても困るぞ。大人しく柔軟体操をしようではないか水川白亜よ。

嗚呼、どうしたらこの 子供 は大人しくなるのかな。亜夕、お前も何か言ってくれ。壁に寄っかかって「腰がいてえ」なんてジジイみたいな事言ってる。お前は白亜の彼氏なんじゃないのかい。俺一人じゃどうしようもないって。

「や、優しくやるから。な、白亜」

「……判った。痛くないでね？」

やっと判ってくれたらしい。ああよかった。どうやら俺の『優しく』というフリーズで柔軟体操を受け入れたのだろう。俺達のグループだけ体操がいつまでたっても終わらなくて皆減点なんて事になったらイヤだしな。

白亜は零れそうな涙をジャージの袖で拭いて、足を真っ直ぐ前に伸ばした状態でペタンと座る。俺の方に向けられた小さな背中とは、まあ可愛らしいな。

「押すぞー」

「……うん」

グッグツと背中を押した。うわ、折れないかなこれ。

ちなみに背景はジジイのように背中を痛そうに叩く亜夕。

それを背景にして俺はできるだけ優しく白亜の背中を押した。ちよつと痛いかな？

「もういいよ蒼くうん」

「ダメ。これから跳び箱なんだぞ。準備体操だのなんだのしないと怪我するかもしれないからな」

「ふええー」

そうだ。これから跳び箱だ。何段か木の箱のような物を重ねていつて飛んでいく、知らない人は多分居ないであろう有名スポーツ。アレ、跳び箱ってスポーツ？

なんだか白亜がマジ泣きしそうだったので、背中をグイグイと押していた手をパツと離して「終わりだよ」と言っただけ。泣かれると困るしな。

丁度男と女の先生のホイッスルが鳴り集合の合図が出たので背中を痛そうにする亜夕を連れて俺達は集まった。

……話を聞くと。

やはり跳び箱だったか。跳び箱を用意しろという指示が出た。筋肉質な腕を伸ばし跳び箱はアッチにあるからと説明している男の体育教師は眩しい。前はなんかの選手だったらしい。一方女の体育教師はショートヘアで、いかにも活発で体育教師であるという事を示しているかのようにオーラが滲み出していた。二人共バスケの顧問である。

なんでもその二人の話によると、体育倉庫に沢山しまつてある跳び箱を取って来いというのだ。勿論男子な。女子は向こうでマットやらを出すんだな。ふむ、女子だけヒイキか。ま、当たり前だが。話を長々と聞いてからそれぞれ俺達は別れて行動する事になった。白亜は女子の仲良しさんとあちらへマットを取りに行き、亜夕と俺は二人並んで男子が群がる体育倉庫へ。

男子達の表情を見ると跳び箱は重そうだ。

一学期も体育をやっていたがマット運動とソフトボールだった為高校での跳び箱は初めてであり、故に此処の高校の跳び箱なんて初めてだ。

「アオ。何ボーっと突っ立ってんだろ行くぞ」

え。お前その体であの重そうな跳び箱を運ぶつもりか？ 一段一段重いぞきつと。

「何やってる。早くしろ」

「お、おう」

「白亜一番段の数が少ないのがいい」

跳び箱もマットも全て用意し終わり、各自飛べそうな跳び箱の前へ行けと指示されて白亜と亜夕と俺は一番段の数が少ない跳び箱の前にいた。

逆に段数が少なくて跳べなさそうだな。「そうだな。オレも段数が少ないのが……」

便乗しちゃったよ。

「先生の指示も出ているし、この跳び箱は空いているしな。飛ぶか」
亜夕は飛ぶ気満々のようだ。ブラブラとしたジャージの袖を捲つて、亜夕は早速助走をつけた。

お、お、お？ 跳べるか？ その小さい体で。どうだ？
トン。

軽い音が俺の耳に響いた。亜夕が跳び箱に手をついた音。軽々しく自分の体を持ち上げるように跳び、更にまた軽々しく綺麗に亜夕は着地した。

着地するが早いが見て、鼻で笑うかのように笑って一言。「侮るなよ」と。

クラス全員が亜夕に釘付けになっていたらしい。皆拍手喝采。

「すごい、すごいね！ 亜夕くん」「お、チビ亜夕が跳んだぞー」

「可愛い可愛い！ うちに欲しいよー」自己紹介の時同様ザワザワ。どうやら白亜も自分の彼氏の活躍が嬉しかったようで、パチパチと小さな手を鳴らしている。……んな跳び箱くらいで大袈裟な……。

隣でパチパチと手を鳴らす白亜を見て俺は、

「白亜も跳ぶよな？」

「……ええ？ 白亜は無理だもん。亜夕は運動神経いいけれど白亜は悪いんだもん」

「案外跳べたりするかもしれないぞ？ 亜夕みたいに跳べたらまた周りの男子がハアハア息を荒くするかもな」

「いやー！ それは気持ち悪い！」

さすがに息を荒くされるのは気持ち悪いと感じていたようだ。

そんな気持ち悪いという言葉を発した白亜は細いツインテールをいじり、

「……まあ、蒼くんが協力してくれるなら、いい、けどぉ？」

「そ、そうか！？ 跳ぶのか！？ いやぁ、自立してくれたように父さんは嬉しいよまつたく……」

ああ、ようやく自立してくれたのか。まるで巣立つ子供を見送る父親気分ではないか。

「落ちそうになったら助けてね？」

「おお」

「跳べなかったらフォローしてね？」

「ああ」

「何かあったら蒼くんの責任だよ？」

「……………」

随分と要望が多いな、おい。

まあ仕方がない。二人の物事を良い方向へ持っていくのが俺の使命だからな。そこらへんは嫌でも付き合おう。

飛翔無し。継続中。

白亜は、跳び箱から離れて助走をちけた。

チマチマと歩く音が響く。

いつの間にか他の奴らは白亜の跳び箱ギャラリーとなっていて、白亜ファンも亜タファンも真剣な眼差しで白亜の助走をつけるシーンを見ている。先生までもが真剣に白亜を見守るかのように見つめている。口はぎゅっと噤んでいる。

……オイオイ、なんだ、この世にもくだらない光景は。

「蒼くん！ 隣に居て！」

「はい……」

「アオ。白亜に何かしたら後でアレだからな」

アレってなんだ。とりあえず白亜をまた泣かせたりしたらぶん殴られるのが結末であろう。起承転結の結だな。

「白亜たん頑張れー！」

「白亜ちゃん、頑張つてねー！」

「はい！ 飛べるか分からないけど頑張るまーすっ！」

白亜の返答に周りがまた興奮し始めた。「自分としては跳び箱に失敗する姿が見たいよな」。などと。何を求めているんだお前達は。俺は一回ため息をつき、跳び箱の隣に立った。向こうからは白亜がダッシュのポーズで待ちかまえている。どうやら白亜は本気のようだ。

やがて、ツインテールが揺れたかと思うと白亜は俺に合図なしで突っ走ってきた。走り方の可愛さにギャラリーの男共が騒ぐ。

踏み台までやってきて……踏み台を踏み……手について……そう
だ、跳ぶんだ！ 白亜、飛べ！

すると。

「ひゃんっ」

……ひゃん？

高い声が聞こえた。ああ、白亜が跳んだ時に落ちたりでもしたのかな。まあ、確かにすつとんきょーみたいな声だしな。落ちたんだろ。まあ跳べたは跳べたで結果オーライ？ 白亜、頑張ったぞ。ご褒美は亜夕からのほっぺにチューだな。

そう思いにへりと笑って白亜の跳んだ跳び箱を見る。

ん？ んん？

……跳び箱の上にツインテールのシルエツト。小さな腰は見事に跳び箱に乗っかっている。コイツ、跳んでなかったのか！ 飛べなかったからあんな声出したのか。

小さな顔は涙目だった。俺の方を向いている。後ろに少し頭がこちらに向いているのだ。

ダブダブの赤いジャージでこちらを見て。半泣き状態。小さい尻は……うん、まあ、可愛いな、うん。男から見たらな。

「ば、バカ！」

思わず声に出していた。スポーツのできる俺の血が騒いだのだろ
う。

「蒼くん？」

「腰をもっと上げて跳ぶんだ！ 白亜、ちんまりとした跳び方だっただろ？ だから、もっとこう……」

「ひ、ひゃ……」

「え？」

「ひゃあああああああああつ！ アドバイスは有り難いとして蒼くんどこ触ってんのよ！ 変態！ 痴漢！ ばあああああかつ！」

「へぶうつ！」

見事に顔面の頬に白亜のビンタを喰らう。い、痛い。

無意識の内に腰を触ってた……？ 下のほう……？ 嗚呼、全ては俺のスポーツ魂のせいだ！ いつもは面倒くさがってるくせに！ 「ごめん！」と謝り続ける俺だが、跳び箱を跳ぶ事ができなかったショックと俺に……その、触られてしまったショックで白亜はバカ

デカい声を出して泣き出してしまった。

「うわあああああああん！　まだアユにも触られた事ないよおおおおおお！」

「へ、変な事を言うな！」

触られた事ないのか。

「何を納得してるんだ！　皆に勘違いされるだろ！　オレはそんな破廉恥じゃない！　……あ」

「え？」

一通り俺にブチギレた後、跳び箱から降りてきてまだ泣き続ける白亜の頭を撫でながら亜夕は何かを思い出したような表情をし、俺に向かつて不適な笑み（どう考えてもニヤリだ）をぶつけてくる。

え、何？

「アオ。今白亜は何をしている？」

「は？　泣いているんだろ？」

「そうだよな」

「？」

頭の中は疑問符でいっぱい、いつか破裂しそうな気分だ。

「言ったよな、オレ。白亜に何かしたら後でアレだよな。泣かせた上に人の体に触る？　ハッ。お前もいい御身分になったものだな」

「いえ、あの」

「問答無用！」

「ひいひいっ！」

授業が終わって休み時間になり、追いかけれ……帰宅する時にも追いかけて逃げてしまったのは内緒だ。ちなみに亜夕は、教科書が沢山入ったバッグで攻撃しながら追ってきたもんだから恐ろしかった事この上ない。

教科書は案外痛いからな。

結局その後教科書入りバッグでボコボコにされた俺がな。

夕方の断末魔を聞いた人はきっと数名いるだろう。

飛翔無し。継続中。（後書き）

お久しぶりですー。空蝉です。

忙しい事が多々ありましてこれない日が続き……やっと此処のサイトに来て神実の亜月を更新し、今日になり、今に至るわけです。

ああ、やっぱり久しぶりだなー……。

またまたスペースをお借りしました。ありがとうございます。

ちなみに体育という目次が二つあると思いますが、なんていうのかな。体育1を保存しながら書かずそのまま投稿してしまったので仕方なくこれは2という形で投稿させていただきました。いやはや、申し込みないです。

見ない内にユニークアクセスや累計アクセスが増えていて本当に嬉しい事この上ありません。

題名で皆さん来てくださるのでしょうか。中は駄作ですがねー。

いや、それでも苦勞しているのですが。

長ったらしくなりました。

では、今後も応援よろしくお願いします。

空蝉 彼方でした。

亜タ・パニック！

……休日だ。

あの亜タの鞆でボコボコにされた日から何日か経ち、あつという間に今日はもう休日。日曜日だ。

子供のお守り（おもり）もしないで今日は俺だけの安らかな時間が過ごせる。しばらくやってなかったネットゲーでもガッツリとやるか。それとも今日はのんびり寝ていようかな……。

二人が居ないと少し寂しいという気持ちも半ばあったが、今日は一人の休日を満喫しようと思う。勉強も必要だが、今の疲れきっている俺にはやっぱり休憩だよな。マンガでも読むか？ ゲームやるか？ 寝るか？ 中学時代の女子とゆるーりメールでもするか？ モヤモヤと悩んでいたが。

結局自分の部屋で、自分のベッドの上で寝ころんで休憩する事を俺は反射的に選択していたらしい。いつの間にか俺はふかふかのベッドの上で寝ころんでいた。しかも^{まぶた}瞼を閉じている。睡眠優先になったという事は俺も少し年をとった？ ……いや、まだ年をとったとは言えない年齢の俺なのだが。

……俺も亜タみたいに可愛い子見つけてデートでもしてていい年頃だよな。

無理か。ああ、無論、無理だ。

最近は亜タと白亜の傍にいて女子と話した時なんかないし。ていうか入学当初から女子とは話したりしていないのだから。

彼女を作ると言っても相手はうちのクラス女子だ。全てはうちのクラスの女子が悪い。

第一に。チャライ。金髪に染めている奴もいれば茶髪や不自然すぎる黒髪など。コイツら校則という物を知らないのか？ と誰もが

言いたくなるだろう。

本当はうちの学校は校則という物がしっかりと存在している。髪を染めるのもむやみやたらにスカートを短くするのも禁止されている。それなのに変な事に憧れを抱いているバカな女子共はスカートを短くし、髪を染め、理解不能と言っているくらいに文字を書くわメールを送るわ……何が可愛いんだ？ その理解不能ギャル文字でテストを減点された奴だっている。

女子というのは理解不能だ。

だからきつと俺の女の子のタイプとしてはそんなチャライバカ共のような女の子で。清楚で礼儀正しくて、化粧も何もしていなくて……大人しいというか、顔が綺麗とかじゃなくて『綺麗な』女の子がいい。居るのだろうか。そんな子。

いきなり耳に音楽が流れ込んだ。どうやら流行りらしい元気な曲だ。

その音に異常に驚き、俺は目を一気に覚まして飛び起きる。

眠いなあと感情を今持っているという事は俺はタイプの女の子を想像している間に寝ていたのか。バカだな、俺も。

その音源の枕元の携帯を急いでパカッと開くと、画面には「亜夕」と名前が表示されていた。亜夕から電話か。それにしてもまだ朝と昼の微妙な間の１１時だぞ。一体アイツは俺に何を話したいのか。それはさておき早く電話にでないとヤバいので、急いでボタンを押して携帯を耳にあてた。

「も、もしもし？」

.....

「亞夕？」

「もしもし？　じゃなあああああいっ！　お前、オレの電話を

待たせるとはいい度胸してるな。また鞆攻撃を受けたいのか？」

たとえ電話だとしても、亜夕の怒り度が判る。

「ご、ごめんごめん。……で、用件は？」

亜夕の凄まじい怒鳴り声がまだ耳に残っているような気が俺にしたのか、思わず片耳を塞いで会話に望む事にした。俺の行動がもし亜夕に見られていたら今以上に怒られているだろう。

『アオ、今日暇か？』

「いや、暇なんだけど俺リアルに同性趣味ないぞ？」

『そっちの意味で言ったんじゃない！ オレと白亜の事だ』

白亜？

しばしの無言の間に俺は耳をすませる。本当に静かだったのか、それとも白亜の声が大きかったのかよく解らないが確かに白亜は「アユー。暇ー」と嘆いていた。相変わらず高くて可愛い声だ。少し耳が癒されたのが解る。

「今お前等何処？」

『白亜が遊びに来いってメールしてきたから仕方なく朝の8時からわざわざ白亜の家に来たんだ。両親は居ないらしい。昨日から二人も仕事だとか。あの両親はいつも大変なんだよな。まあそれで白亜がどうもつまらないらしくて。それで遊び相手がオレなんだよ。……何言いたいかわかるか？』

白亜はつまらないと思えば氏のシヨタ亜夕を呼んだ。そして亜夕が仕方なく朝っぱから遊びに来てくれ、……問題はその後。まず少し説明しよう。白亜はロリだ。ロリだからこそ白亜の部屋はすごい。可愛いぬいぐるみ、服、カーテン。何もかもが女の子らしい、ロリの中のロリの私物と言っているほどの物が白亜の部屋の中納められているのだ。ご両親は白亜にベタ惚れらしく、（わからなくてもないが）一人っ子の白亜のいわゆるバカ親らしい。そこでその家具なども可愛くされたというわけだ。

問題がその部屋。亜夕は其中で一人、ロリ白亜の相手をされているのだ。

きつと、無理矢理頭にリボンを乗つけられたり可愛い服を着せられて「可愛いね、可愛いねー」なんて言われたり可愛くデコレーションされた携帯でパシャパシャと撮られたり。そんな状態に置かれているに違いない。想像するのはとても簡単だ。

「解った。状況は把握したぞ、亜夕」

『そうか。そこで、お前と電話する為に手を洗いに行くからと洗面所に居るオレだ』

「普通トイレじゃないか？」

『うるさい。そんな事言ったら勘弁にキアラ崩れた。……とにかく。オレが解放されたいというのもあるけど、白亜と何処か行きたいんだ。ウインドウショッピングでもいいから。ただお前が居ないとオレは可愛い服を白亜に試着しろと迫られるだろう。だから、来てほしいんだ。んー、そうだな。早く解放されたいからタイムリミットは電話を切ってから30分にしようかな』

いやそれ無理だろ。

『頼む。早く来てくれ。じゃ』

「ちょ、お、」

ブツンと電話は切れてしまった。

しゃあない。白亜の家は此処から遠くはないしな。着替えて用意する時間もあるだろ。

切れた電話を少し呆然と見つめてから俺は着替え始める。待つてろよ、亜夕！ 今すぐ可愛い物から解放してやるからな！

亜タ・パニック！（後書き）

いやはや、またまたお久しぶり（？）でしょうか。空蝉です。お久しぶりなのかな？

神実の亜月 という私が書いている小説があるのですが、何しろこちらより話数が少ないわけで。どうしてもこっちを更新しなきゃとは思っていたのですが……。

神実の亜月は連載中です。検索をかけてみてくださいね。

ちなみに。

この2人＋1人 休日 ですが、次の話に繋がっていく予定です。まだ題名は未定ですが、2人＋1人 解放 とやらを書こうかなあと思っています。

話的に亜タと白亜のデートと、その中に蒼が入る話でしょうか。

ちなみに亜タがただ単に蒼の事をアオと呼んでいるだけでやっぱ読みは「そう」です。解りにくい名前をつけた私がバカでした……！

では、またまたスペースをお借りします。

休日 のほうの話をクリックしてくださった方、ありがとうございます。

コメントや評価は大変励みになりますので、いつでも評価受付中です。まあ、こないという現実が私に差し掛かるのが更に現実だったりしますが（笑）。

では、引き続きロリシヨタ！ をよろしくお願いします。

おままごとで隠し事

息を荒くしながら、なんとか指定の時間よりも早く白亜の家の前に到着した。

とりあえず邪魔にならないように玄関のドアの狭い隙間にボロの自転車を入れて、亜夕を想像して焦る。すぐに助けてやらなければワタワタとした様子の俺は、『水川』と書かれた表札の近くの呼び鈴を押す。

通常のピンポンではなく、ブーブーという音だった。

それから間もなく呼び鈴というよりブザー的なから白亜の声が聞こえた。『あー蒼くん？ 今いくよー』とルンルンの白亜が俺にそう言った。

カメラでも見て俺だとすぐに認識したのだろう。

それからパタパタと歩く音が聞こえ、いきなりバアンと威勢良くドアが開いた。

「お、おう、白亜」

「あー、うん、蒼くんこんにちはー。えと、アユが呼んだんだよね？ ま、入って入ってー。お茶とケーキ出すよー」

言われるがままに俺は靴を脱いで玄関に入り込む。靴を脱ぎながら、「俺、流されてないか？」と亜夕を助けに来たという指名を捨てられたという事態に近いのか、そう思った。

つやつやとした茶色の木のような物でできた廊下を滑りそうに歩き、白亜についていき部屋に向かう。……歩きにくいかも。

そして辛うじてついたのが、勿論白亜の部屋。木製かと思われるドアには表札のようなプレートのような物で『白亜の部屋』と書かれていた。部屋の中はプレートからして想像できる。

「蒼くん、遠慮しないで入っててねー。白亜、ケーキとか持ってくるよ。その間にアユと話してたりしててね」

その間？

「おお、わかった。ケーキすまないな」

白亜がピンクのスリッパをパタパタさせて階段を下りるのを見届けてから俺はすっかりヒンヤリとしたドアノブに手をつき、躊躇いがちにドアを開けた。

「……………」

ドアを開けて一步踏み出した世界には、正に絶句という単語以外に思い浮かばない。想像通りだ。

お姫様のようなピンクのベッド。学習机って言うのか、コレは！とでも言いたくなるほどの白くて所々にハートが象られた、きつと『学習机』。ピンクのレースかと思われるカーテン。熊の縫いぐるみ。ちなみにでかい。後は想像がつくだろう。エトセトラとでもしておこうか。

呆然と立ち尽くしていると、ほぼ確実に病んでいる亜夕がそのピンクのベッドにちょこんと座っていた。半泣き状態。

薄いピンクの女の子用のフリフリのワンピースを着て、ピンクの花を頭につけられ、短髪を無理矢理二つに結われている。傍らには無理矢理置かれたのでかろう熊の縫いぐるみが居た。

ごめん、亜夕。笑っていいか？ 似合ってるぞ。

「ぷ……………」

「な、何が可笑しい！」

顔を真っ赤にして俺に向かって亜夕はそう言った。

隣の熊の縫いぐるみに亜夕はドスドスとパンチをくらわせて凄顔で熊を睨みつけながら、

「恥だ！ 大神亜夕の恥だ！ こんな姿オレじゃない！ 恥だ恥だ恥だ恥だあああああああつ！」

「亜夕、落ち着け。縫いぐるみが破れる。大丈夫だ、似合ってるぞ」「似合う似合わないの問題じゃないだろうが！」

すみません。

まるでゲームのラスボスのように俺をキツと睨み、引き続き熊にアップー、パンチ……ボスボスと音がする。熊も耐えてるよなあ。
「大体蒼。お前、オレを助けに来たんだろうが。少しは着替えさせるだのしたらどうだ。今白亜が居ないんだからとりあえずオレは外に出て解放されたいんだよ」

「白亜、遅すぎるよな」

「チャンスという事だ。多分、ケーキを潰してしまったりしてるんだろ……」

となると、白亜のドジが幸運になるわけだな。わたわたししている白亜の様子が伺えるようだった。

「とりあえず着替えさせてくれ。どうやって脱ぐか分からないんだ」「仕方ないなあ」といいつつ、俺は亜夕の着ているなんともまあ可愛らしいピンクのフリフリワンピースに手をつけてチャックを後ろから下ろしてやった。

えーと、勘違いすると思うかもしれないが至って今の俺は興奮してないし、第一薔薇だのビーとエルなど興味ないからな。

チャックを下ろして脱がしてやると、亜夕は中に何故か体操着を着ていた。名札の『大神』がちろりと見える。

「ああ、体操着か。別にいいだろ。白亜に着替えさせられる事を想定していたんだ。着替えを見られるのはさすがにイヤだし。でもまさかこんなの着せられるとは……」

そりゃ予想外だわな。

というわけで、体操着の上から元々着ていたらしい生温かい長袖のグレーのシャツと、長袖で厚手のブラックのパーカーを着せてやる。ズボンくらい自分で履けよ。

「わぁーってるよ」

ちゃんと「わかつてるよ」と言ってほしかったのだが、亜夕はやっぱり不機嫌なのであえてツッコまないようにしておく。

ぶすくさと文句を言いながら亜夕は紺のズボンを履いて、ちゃん

とチャックも閉めた。着替えた亜夕はなんだか抜け殻から抜けただかのようにサッパリしたような表情をしている。

「はあ……一件落着。白亜のアオのケーキを手間取ってくれならしいな。おかげでまだ来ない」

「それはいいんだが、大丈夫かな、白亜」

「とりあえず、白亜を置いて逃げるぞ。早く逃げないと追いかけてくるからな。此处は二階だが、飛び降りて着地できる高さだし此处から逃げるぞ」

飛び降りるって、アンタ。

「ホラ、早く早く」

亜夕は手をヒラヒラと振り、窓に足をかけた。大丈夫か？
その時。

「ごめんね、ケーキ探しても探してもなくって買ってきたー！
蒼くんとアユと白亜の分だよー。ついでにお茶も持ってきた。紅茶でいいかな？ ……って」

そこまでのいい終えると、亜夕を『可愛くした』犯人、白亜がやってきた。少し顔は蒼白していて、俺達の行動に啞然としている。

「あああああ、アユ、何やってんの！ まさかまた白亜から逃げだそうとしてたんでしょ！ もう、許さないんだから！」

許してください……！

「蒼くんは黙ってて」

「すみません」

「……アユ。可愛い服まだまだあつくさんあるのー。だから逃げようとしたお詫びに着てね、コレ。あ、蒼くんにも着せよっかなあ
……？」

魔性の笑み。

白亜はにまーと微笑んでから逃げようとしていた亜夕を引っ張り、無理矢理パーカーなどを脱がしはじめた。ちよつと、いくらなんでも限度つてもんが……。

「蒼くんは後で白亜みたいにツインテールにしてあげるよ。……も

う、アユジタバタしないでえ」

「うわあああああああつ」

俺も、逃げたほうがいいのかな。

見事に俺は小さいツインテールにされ、しばらくおままごとが続くのであった。

兄アンドリーふ？

月曜日は、やはり何処の学校もほぼ同じように朝会で始まるのである。

定番と言えば定番のダルい禿校長の長々とした訳の分からない話した。ちなみに、うちの校長はもう早々と年なのか活舌が悪く、何を言っているか解らない次第である。通訳が欲しいね。

定番なのかどうか解らないが、夏場には鼻血を出して慌てる奴も居るし、季節限らず貧血でぶっ倒れて保健室行きになる奴も居たりする。やはり、朝会の中での出来事だ。

幸い俺はぶっ倒れてみたり鼻血を出してみたりした事はないが、部活をやっていない事もあって長ったらしい朝会には付き合っただけないし、疲れる。教室に戻ると「解放されたぜー！」と、喜びに満ち溢れるだろう。

と、関係のない話は置いて。

今日も同じように朝会だ。さつきいつもぶっ倒れる奴がまた今日もぶっ倒れたが、校長は気付いていないらしいのか意味不明語で話を続けた処だ。先生がその生徒をまたかと思いつながら（多分そう思っていただろう）保健室に連れていっていた。

……ダリイ。

一言で言えば、ただそんだけ。早朝とは言わんが、朝っぱらからこんなやつてられっかよ。

うちは、校長の話が終わると生徒会役員のお知らせが入る。

校長が自分の髭ひげを撫でて「ふおっふおっ」と笑ってから舞台を降り、今正に生徒会のお知らせが入ろうとしている時だ。

生徒会役員の、大神おおかみ亜夕あゆうだ。ふうん、今日は亜夕か。

そつえば昨日亜夕と一緒に白亜に酷い目に合わされたな。白亜は相当喜んでいたのだが。

昨日の事でやはり期限が悪いのか、亜夕はまたムスツとした顔でトントンと軽く階段を上がる。此処からでも身長が小さいのが解る。

列の前の方を見ると、やはり白亜が亜夕の勇ましいような微妙な姿を見てワクワクしていた。周りも白亜と同時にワクワクしているのが解る。

相手が今日は亜夕だからだ。もし普通と男子生徒だったら此処までざわめきは起こらない筈だ。そこまで亜夕は『人気』なのだ。

やがて、マイクの前に亜夕が立ち、皆が静かになった。

生徒会からのお知らせ。何を知らせるの分らないが、どうせ落ち葉掃きだの制服のみだれについてだろう。

「……………」

どうやらマイクが高すぎたらしく、亜夕はムカついた表情をしながら（明らかにキれている）、マイクの高さを調節する。随分と亜夕に従い短くなった。

「……生徒会からのお知らせです。落ち葉掃きを行います。強制はしませんが、できれば来る事。朝の七時に校庭に集合し、各自^{ほづき}箒を利用。以上」

やはり、落ち葉掃きだったか。

「くっそー、落ち葉掃きは明日じゃないのかよ！ しかも何で放課後の今日に俺が落ち葉掃きなんかやってんだ！ 意味わかんねー！」
「仕方ないだろ。生徒会は放課後にも落ち葉掃きをやる事になったんだ。オレ達だけじゃ足りないからお前と白亜も呼んでやったんだ。感謝しろ」

「感謝も何も……。しかも、白亜お前落ち葉で遊ぶなー！」

白亜は制服を汚すのがイヤなのか、何故か体育着を着ていた。こまみに上に赤ジャージ着用。そんな姿で、色々な色をした落ち葉を拾っては並べ、拾っては並べ。

「見て見て、蒼くん。落ち葉の電車ー」

五、六枚並べてある。白亜にとつての電車らしい。

「はいはいー、よくできましたよかったですー。って、違うだろ」

「おお、蒼くんのノリツッコミはテンポ良いねー！」

親指を立てて、俺に見せてくる。ノリツッコミの件で褒められても嬉しくはありません。

一応、俺も渋々箒で落ち葉を掃く。まあ、一月くらいになったら落ち葉は無くなるかもな。落ち葉掃きという存在もしばらくは消えるだろう。辛抱だ。辛抱。

ひょっとして、俺は朝と放課後にしばらく落ち葉掃きに参加する事になるのか？ 強制という事でムシヤクシャするが、とりあえず良い運動にもなりそうだし朝の早起きという事で。

七時はキツいよな。起きれるだろうか。携帯のアラームでいいかな。

「こらアオ！ ポーツとするな！」

「は。はい、すみません亜夕様」

妄想に浸っていたら、亜夕に叱られた。

ふうと溜息をついてまた箒で落ち葉を掃き始めると、白亜が無邪気に恐ろしい事を言った。

「ねえアユ。蒼くんに働かせたいなら、これだけ掃かないと何々するぞーって何か決めておけばいいんじゃないの？」

まずい、そんな事言っな、白亜。

「それもそうだな。それもそうだし、お前やる気ないという事はお前の使命を忘れてるんじゃないのか。ということで、使命を少しは果たせてあげよう。オレ達の役にたつんだ。とりあえず落ち葉掃

け。あつちからあつちまで」

小さな手で指定された距離。それは、十メートル以上ある長さの道だった。

ちなみに俺の学校は、まっすぐな長すぎとも言えよう道の隣に位置するわけで、十メートル以上はある道が続いているのである。

「そ、それは長すぎだろ！」

「お前ならできる。できないのならまた鞆でぶっ叩くぞ！」

「脅し！？」

「頑張つてね、蒼くん」

「おい……」

仕方ないから、落ち葉を全速力であつちからあつち（十メートル以上）掃く事にする。十メートルが短そうに見えても、落ち葉は溜まっているので時間がかかりそうだ。

校庭の砂や道の砂が塵取りちりとりなどに入るだろうから、もつと時間がかかる筈だ。たとえ十メートル以上くらいだとしても、悔る事はできないし本気でやらないと亜夕の鞆が待っているぞ。しかも、夕飯に間に合わない可能性も考えられるのだ。

「……やるか……」

溜息をついてから制服の袖を捲まくり、すっかり冷たくなつた筈はずを手にして落ち葉を掃く。テンポの良い音が、落ち葉を掃くと同時に俺の耳に響く。

「こらアオ！ やる気あるのか！」

「ひいひいひい！ ありますありますやらせてください亜夕様あ！」

箒のスピード、アップ。シャッシャッシャッシャッシャッシャッシャッシャッシャッシャッ……。俺、召使いみてえだ。

そのまま、大体七時前まで生徒会は落ち葉掃きを続行していた。

まあ、大体は俺が落ち葉を掃いたも同然なのだったが。

落ち葉掃き、終了！

生徒会の野郎達と共に、終了の挨拶をする。「今回もしっかりと落ち葉を掃いたので、反省を一人ずつ……」てな具合に。反省つてのは無いので、調子こいて「ちゃんとできました」とほざいておいた。一番反省すべきは亜夕だ。俺を脅しておいて人任せ。まあ、別にいいんだけど。

ていうかそもそも白亜が来ていた意味はあったのか？

白亜をちらりと横から見ようとしたが、帰宅合図がでたので校庭にほっぽった鞆を取りに行こうとした。

が、それを止めたのは白亜の声だった。

「……………」

声ではない、白亜の無言。声というより、様子と表現したほうがいいのか。唇噛んで、目には涙溜めて。今にも大声出しそうな顔で。

「お、おい、白亜。どうしたんだよ、泣くなよ」

何があったのかは知らないが俺の本能と『使命』血が疼くので、白亜に声をかけずにはいらなかったのだ。

え、うそーん。泣いてる？ おい、亜夕の奴何処行つた？ まさか、帰った？ そういえば見たい戦隊物ドラマが夕方^{（ヒル）}にやるとか言ってたな……。

シヨタとは言え、こんな時にシヨタさらけ出してんじゃねえ！

なんだよ、戦隊物って！ お前高校生だろお！ と叫びたくなったがその本人が居ないわけで。生徒会の奴等も帰るの早いし。

ということは、俺と白亜だけ？

この子を泣き止ませるとでも言うのか？

「は、ははははは！ おい、似合わない泣きつ面をまた今日もしてるな、白亜！ 一体どうしたんだよ、あははは……」

すると白亜は涙声で、

「ペンダントを、無くしたの……」

と、一言。

これがまた普通の女子の野郎だったら俺はぶっ飛ばしているかもしれないが、相手は白亜なのだ。ペンダントを無くしたと言われたくらいで俺は怒らない。何度も言うが相手が白亜だからな。

……ちよつとまで。ペンダントとか、アクセサリーなどを持ってくるのは一応校則としてヤバイし、生徒会の前で堂々とペンダントを付けていたのか？ 生徒会が白亜だからの許したのだろうが。

あの、ハート型で真ん中にピンクのラインストーンがついた、ピンクゴールドっぽいやつか？ と聴くと、

「うん。本物の宝石じゃないし、本物のピンクゴールドじゃないけどお兄ちゃんがお小遣いなくてピンチ！ な時に買ってくれた安いの……」

お小遣いなくてピンチ！ と安いという言葉は余計じゃないか。

「俺が同じの買ってやるから、」

「駄目なの！ お兄ちゃん、白亜が誕生日の時に買ってくれたから

……！ あれじゃないと、駄目なの……」

「……………」

そうか。お兄ちゃんっ子だったな、白亜は。

確かに、大事そうにつけているのは覚えているし、胸元でキラリと目映く光っていたのも、覚えている。白亜に似合った可愛いやつだった。

絶対に何かあったら助ける。守ると契約されたのだから（亜夕に勝手にされたのだが）、俺には今白亜のペンダントを探すという使命ができた！ だから、落ち葉掃きよりも頑張ってやろうじゃないか！

「わかった、白亜。そのペンダント絶対に見つけてやる」

「ホント？」

白亜の顔がパアッと明るくなったので、その笑顔だけでも、感謝

されるだけでも俺は頑張れるような気がした。

色々な所を探した。

道、残った落ち葉、^{へい}併、アスファルトの罅^{ひび}の中も。

ない、ない、ない、ない、ない、ない、ない、ない、ない。

くそ、綺麗に掃除されてやがる。ひよっとしたら、落ち葉と一緒に片付けられた？

「そ、蒼くん。ありがとう。もう白亜、大丈夫だから、」

「それじゃあさっきと言ってる事が違うぞ。アレじゃなきゃあ駄目なんだろう」

「でも、」

「大丈夫」

ポンと、白亜の頭に手を乗せて撫でてやった。ツインテールがぐしゃぐしゃにならないように、ほどほどに。撫でると、白亜がはにかんだのがわかった。

「……お兄ちゃんみたい」

「ん？」

「な、なんでもないもん」

ペンダントは、無かった。

もう探してない所はない。諦めたくはなかったのだが、どうやら此処で諦めざるを得ない。内心、諦めたくないのだがこの時間。白亜もきつと寒いだろう。それに、学校の時計はすっかり七時を回っている。俺も帰らなきゃ怒られるぞ、鬼母に。

怒られるのもイヤだが、白亜のペンダントが見つからなくて白亜が悲しい思いをするのが一番イヤだ。そんなのは、耐えられない。

だから地面を探した。あるはずもないのに。

寒いのに、汗が伝^{つた}う。

「……蒼くん……」

白亜が泣きそうになった、実にその時であった。

「白亜」

遠くから、白亜の事を呼ぶ声が聞こえた。

人物は近づいてくる。亜夕ではないのは確かだ。やがて、ドンドン近づいて、やっと姿を把握できた。視界にその人物は入る。

俺より少し年上だろう。背は俺より多少、高い。男だ。声はやっぱり俺よりもかっこよくて、余計な一言だが彼は声優にむいているだろう。ルックスもよかった。

「お兄ちゃん……！」

はい？

「お兄ちゃんお兄ちゃんわーいっ！」

さっきの涙が嘘だったかのように、白亜は『お兄ちゃん』に抱きついた。まず一言。進捗の差がありすぎ。

そして一言。

何。この急展開。

「心配したんだ。白亜の帰りが遅かったからね。お兄ちゃん心配したんだぞ。もー白亜が居ないと落ち着かないし勉強にも集中できないし」

ルックス良い割りにはシスコンか。

すると、白亜のお兄さんは俺のほうを向き、

「こんばんは。蒼くん、かな。白亜から話は聞いているよ。メロンパンの時は凄かったんだって？」

メロンパンで印象づけられているようだ。

「で、何か探してた？ 困ってたみたいだけど」

ルを送ってきてそのまま会話メールになった時である。

『みずかわゆづき水川優輝』。名前に優しいという字が入っているなんて、彼に似合っているなあと思った。

そして後日早朝、今日の落ち葉掃きにて俺は落ち葉を一枚掃き逃していたので、亜夕の鞆アタックを喰らう事になる。

兄アンドリーふ？（後書き）

これを見てもらった友人に、誤字を指摘されました、空蝉を「そ
らせみ」とよく間違われる「うつせみ」彼方です。こんにちは。

誤字、直そう……。

それが、感想です。ああああ誤字恥ずかしい！

暇があるときに、誤字を直そうと思っています。

新年修正フォーム

冬休みはダラダラと過ごす！

はい、これ俺のモットー。

の筈^{はず}だったのにまた餓鬼共から誘いが来たぜ。

クリスマスは、両親と俺でかなり寂しい時を過ごした。なんせ俺に妹弟兄姉が居ないわけだから余計寂しい。寂しいというか侘^わびしいぞ、うちは。

未成年の俺は適当に炭酸莓味ノンアルコールのシャンパン、いわばジュースを飲み、両親はこれまたすげえ豪華なワインを一本飲んでいた。香りが良いらしいな。

そして年末は適当に紅白見ながら「知ってる奴が居ねえ」とぼやき、ソファでダラダラとし、ぱつとしない年末を過ごし……

西暦の一の位が一つ動いた。

元旦には更に適当に書いた手抜き手書きの年賀状を出し、ダラダラした。

そして何日かダラダラと過ごし今の一月四日に至るわけである。

第一感想。冬休みもうすぐで終わりかよ。早いよ。

第二感想。さみいからとつと春来い。そしてさっさと二年生になつて先輩になりてえよ。

ほんとに、そんだけなのである。俺ほんとに将来大丈夫か？ なんて思う時が多々あるけどな。

そして、ダラダラ日常から解放してくれるように（迷惑だけだな）一通のメールが届いたわけである。内容はこんなかんじ。

《件名：明けましておめでとう蒼くん！ 本文：蒼くん、明けましておめでとう！ 今年もよろしくね。というわけで、今から蒼くんを白亜の家にて主催の新年パーティーをやります！ イエイ！ 心配しなくて大丈夫だよ、アユもお兄ちゃんもいるからね。誰か誘ってくれてもいいし。じゃあ、今から速攻で来てね。アユが怒っちゃうから。蒼くんの顔に筆で落書きしたいんだって。じゃあ、また後で〜》

「……………」

メールが来てすぐ、俺は無言についてなった。何、速攻つて。筆で俺の顔に落書きして何？ イエイって何？ 心配はしないけどさあ。

速攻つて事は行かないといけないよなあ。

白亜のメールをしばらく眺める。ギャル文字もなければむやみやたらに絵文字が使われていないシンプルで正しい文のメールだった。絵文字が使われてたりギャル文字だったら行く気しねえよな。うん。

と、まあ、それはさておき。

バッグの中に机の上にある財布やら何やらをバンバンバッグに詰め込んで、次に携帯を仕舞い込む。物はあるまい要らないかな。

実を言うと情けない事にジャージを着てゴロゴロしていたので、タンスから適当に服を取り、そして上着を着る。バッグを持ったら外出できる格好に早変わり。

実に五分も経たなかった出来事である。

階段を駆け下り、大急ぎで玄関へ行き、スニーカーを大急ぎで履く。が、紐が解けてしまったために右の紐をちゃんと結び直す。どうせなら左もやろうかと思いい左も結びなおした。

玄関の靴棚の上に乗っかっている鍵ケースに勢いよく手を突っ込み、自分の自転車の鍵を取り出した。

母さんの声が聞こえないという事は俺がグウタラしている内に買
い物に出掛けたのか。ちなみに父さんは魚釣りに早朝から出掛けて
いる。後輩や先輩達と一緒に。

「……いつてきまーす」

誰も居ないが一応小声で挨拶。その後静かにドアを閉め、鍵をか
け、鍵をちゃんとかけたよな？ と物静かに確認してからダッシュ
で外にでる。

俺の家の門に無造作に置いてある自転車の鍵を大袈裟にガチャガ
チャと解き、自転車に跨る。ママチャリじゃないぜ。マウンテンバ
イクっぽい。俺はよく解らないけど父さんの趣味だ。俺のだけとな
「よしっ」

面倒くさいので、箆かこにしっかり入れないで取っ手って言うのかな、
それに掛けた。

用意ができた後は全速力で白亜の家へレッツゴー。全速力つて
のは必須。亜夕が怒るからさ。

「遅い！ 遅い遅い遅い！ どんだけ筆を持たせてたと思ってたん
だ！」

亜夕の罵声がとんだのは、俺が白亜の家のリビングにたどり着い
た時だった。

玄関の側の呼び鈴を鳴らし、ロリコンお兄ちゃん（俺の思いこみ
だが）が俺を招き入れて、リビングにたどり着いたと思いきや硯すずりと
筆を持ってオーラをメラメラとさせている亜夕の姿が在ったのだ。

それで、俺は「遅い遅い」と怒られたわけ。

適当に「すいませんでした」と謝罪してからまずは新年の挨拶を
お兄さんと白亜と亜夕にする。キッチンに居る若き白亜のお母様に
も挨拶をして、上着をソファに置かせてもらった。

白亜のお母さんは、若い。まだまだ美人さんだ。長い髪と優しい
表情が亜夕に怒られてしょんぼりとしている俺の心を癒した。でも、

怒鳴り散らしている亜夕の事を怒ってくれてもいいだろうに。そう
小声で問いかけると、

「亜夕ちゃんは昔からそうなのよ」と、ほやーっとした返事が返っ
てくる。それでいいんかい。

お兄さんは私服だった。白亜はまたとびきり可愛くお洒落してい
て、いつものツインテールがツヤツヤしている。ワックス？ ピン
クでフリフリのワンピースは白亜に似合っているぞ。

「で、ええと、蒼くん。アユが待ってたから……ね？」

ね？ ってなんだ。話を急に換えられても困るぞ！

「アユ、うん、書きちゃって。何書くの？」

「今年は丑だから牛かなー」

亜夕が子供っぽく目を輝かせて、何を書こうか考案する。ああ、
今年は牛年だよなあ。牛肉食いまくるぜ。ワクワク、ワクワク……
って、これは要らん思考だ。

「ちょ、ま、あゆ、う！ やめ、やめ、やめい！ それ洗濯して落
ちる墨だろうな？ 顔洗ったら落ちるよな？ 本音言っと、書かな
いでくれえ！」

「それは無理な要望だよ蒼くん」

「慣れない口調使って誤魔化すな！」

「あ、蒼くん。多分それ落ちない」

マジですか。とりあえず書かないでくれ。

「優輝。アオを抑えてくれないか」

「了解」

「了解じゃねえええ！ お兄さん、何年下の言うこときいてるん
ですか！」

「妹以外にはSなんだよね、僕」

「驚愕の新事実！」

「そうそう、お兄ちゃんって『ド』Sなんだよね、サディスト」

「こらあああああ！」

お兄さんに羽交い締めにされる。それもニコニコ爽やか笑顔で。

Sなんですね、Sなんですね！ 周りにSが多すぎて困る。このまま俺の精神がどうにかなりそうだ。いつしか周りの物全てが「S」というアルファベットに見える事になるだろう。

すまん。それは嫌だ。勘弁してくれ。

すぐ落ちる墨だったら落書きしてもいいさ。だけど白亜が言うには洗っても落ちない墨なんだろ？ 帰る時俺はどうなるんだろうね。落書きされた顔を道行く人に面白がられるか。冷たい目で見られるか。どっちも嫌だぜ馬鹿野郎。

「なーにを書こうっかなー」

もう、好きにしてくれ。真っ黒でもいいさ。

「とおっ！」

亜夕の要らないかけ声と共に、墨がたつぷりと染み込んだ筆が勢いよく構えられた。

その筆は宙を舞い、俺の顔面に近付く。

実に一瞬の事だった。生温い、ヌルヌルとした感触が俺の顔を這いずり回る。目の前に見えるのは、亜夕のニヤケ面。それにしてもお兄さん、痩せてそうなのに意外とガツチリしてるんですね……。関係の無い事を思うという事はそろそろ俺は危ない。

白亜は亜夕の後ろで必死に笑いを堪えながら心配しているフリをしている。ひでえな。

「はいなー。出来上がりっ」

亜夕が、筆の墨が跳ねた顔を服でグツと拭いてから汗も拭いた。んな、大袈裟な。

「おおー」

お兄さんと、白亜の歓声があがる。あ、もう一人。白亜のお母さ

ん。

「亜タちゃんは、絵が上手いのねえ。この蒼くんに書かれたのなんか蒼くんごと発表会に出してもいいんじゃないかしら」

何を言ってるんですか。

「アユ、これは芸術だよ、芸術！」

「そういえば亜タくんは絵が上手いんだよね」

「やっぱりそう思うか？」

「蒼くん、鏡見てみなよ！ 格好いいよ！」

この状況にキョトンとするしかない。白亜が小さい手で小さいポシェットから手鏡を出して、俺のほうに向けた。鏡に映る自分の姿を見る。

「……おおー」

すごいぞ、これは。

ちなみに丑年だが、頬に書かれたのは竜だった。書くスピードはとても早かったのだが、何か芸術的な竜である。日本の屏風や和紙に書かれてそうな竜だ。男子から見たら格好いいだろう。更にちなみに、墨は乾きかけている。

「すげえな、これ」

「丑にしたかったけど、ダサいから。優しいオレはさすがに丑を書くのは酷いかなーって思ってな。牛肉を書いてもよかったぞ。恥ずかしい目にあうだろうけどな」

こら。

「入れ墨みたいで、格好いいんじゃないかな」

羽交い締めにするのを止めて、お兄さんはフオローしてきた。

まあ、いいんだけどさ。

新年修正フォーム（後書き）

新年編は、次に続きます。

今年も、去年と同じかもな。

そんなこんなで、俺は頼に龍の入れ墨のような物を残しながら白亜のお母さんのとても美味しい料理を口に運ぶ。さつき俺の母さんに「友達の家に居て、新年パーティーをやってるんだけど帰り遅くなったらごめん」とメールを入れたが……夕方からこんなに喰って大丈夫だろうな？ まあいいや。母さんには夕飯は友達と喰ってきただと言えればいいしな。

今の時刻は五時。あの顔の落書き事件の後は亜夕と普通に羽子板をやってみたり（こんな日本人らしい事は初めてだな）、白亜のお兄さんと夕飯の買い出しに言ったり……白亜と戯れてやったり……。つーか俺、ちゃっかり席に座って食事をしているが大丈夫なんだろうな？ 多少心配。

「あははー、大丈夫だよ蒼くん、ご飯は人が多い方が楽しいしねっ。お母さんの料理は美味しいから、遠慮せずに食べてね」

「白亜のお母さんは食べないのか？」

するとお兄さんがニツコリと微笑む。「父さんが今日夜遅いんだよね。母さんは父さんと晩ご飯食べたらしいから、僕達よりも遅くなると思うよ」白亜の代わりに解説してくれた。その後にはドンドン食べてねと付け加えてもくれる。

うーん……じゃ、遠慮無くドンドンいただくぞ。

亜夕は亜夕で毎年こうやって此処で新年を過ごしているのか、慣れた様子でシャンパン（苺味、アルコール無し）を開けようとしていた。が、蓋が上手く静かに開けられなかったらしく蓋を天井まで

飛ばし、飛んでいった蓋にビビって「のわっ」と声をあげていた。
何がしたいんだろうね、コイツは。

白亜はステーキを豪快に頬張っていた。肉が上手く切れないのか
肉が餅のようにのびる。「うわーん、固いー」とか言いつつも噛み
きろうとするのを実行。何やってるんだ、こっちも。

お母さんがバランスを考慮してくれて俺の好きな焼き魚を皆に出
してくれたのだが、白亜と亜夕と皮嫌いという自己中心的な意見に
よって俺の皿には今現在魚の皮が盛られている。魚の皮だけでもイ
ケるぜ！　って人、募集。

「もうすぐで学校だねー」

白亜が残念そうに言った。肉を噛みきる事は諦めたらしい。

「んー、そうだな」俺もちよつと残念そうに言ってみた。二人のお
守り^もは面倒だが仕方ない。「生徒会は何か企画してる事とかって無
いのか？　ドツヂボールとかさ」

「無い」

「あ、そう……」

亜夕は苺のシャンパンをトクトクとグラスにつぎながらニイッと
笑って「まあオレが『ねえねえお兄さん、お姉さん、ドツヂボール
企画をやりたいんだけど……』とか言ったら採用されるかもな」と
言った。最もだ。

「じゃあ言ってくれよ。最近学校で何も企画がねえじゃねえか」

「猫なで声であんな奴らに企画をお願いすんのなんてまっぴらだね」
そうですか。……って先輩の事をあんな奴らって言っちゃいけま
せん。

「別にいいだろ。アイツ等が生徒会に入った目的は内申を上げる為
なんだから。……うわっ」

ギリギリまでつこうとして失敗したのか、苺のシャンパン（何度
も言うがアルコール無し）をこぼしてしまったらしい。亜夕は慌て
て近くにあった台布巾でテーブルを拭いた。

そして拭きながら、「いつかオレが生徒会のトップに立つつもり

だけだな」とか何とか言いやがった。きっとトップイコール生徒会長であろう。

美味しいかつデカイロールキャベツを頬張りながら俺は亜夕に訊く事にした。

「なんで生徒会に入っただ、亜夕は」

「アユは生徒会に入って注目集めて、人気者になりたいんだよねー」
「もう人気者だけだな」

その通りだけどなんかお前生意気だな。

亜夕達と楽しく話しながら豪勢な食事を済ませた後で、白亜のお兄さんは宿題をやるからと言って自室で宿題をやりに行った。俺はとりあえず六時半になったら帰る事にした。亜夕はもう少し留まるらしい。亜夕の家は白亜の家のすぐ前だから、余計な心配は要らないという事だ。

俺はすぐ帰らないと母さんがうるさいから……。まあいいんだけどさ。

ところで、いつか亜夕がとても可愛い服を無理矢理着せられた時に公開された白亜の部屋だが、相変わらずだった。

男の俺はやはりよくわからないのだがラブリーと言うべきなのかキュートだと言うべきなのかよくわからない。だけど女の子らしくて可愛い部屋だというのはわかる。

その白亜の部屋で俺達は学校での事を話したり、まあとにかく戯れた。

そんであつという間に六時半。食事を開始したのが五時で、終了

させたのが六時だから白亜の部屋で三十分は戯れていた事になる。
あっという間だった。

リビングのソファに置かせてもらっていた上着を玄関で羽織り、
靴を履いているとお兄さんが二階から下りてきて、「帰るの？」と
一言。

白亜のお母さんも、白亜も、亜夕も玄関まで来てくれた。

「また来てね、蒼くん」

是非来たいですね。

「学校、楽しみにしてるよ」と、亜夕。それはどういう意味なのか
わからないがどうせ「鞆アタックを楽しみにしてる」という意味で
あろう。そんなニイッと笑う亜夕の隣にひょこつと白亜が出てきて、
「また来てね」と言ってくれた。

「ご馳走様でした」と丁寧に挨拶してから、ドアを開け、外に出る。
まだ夕方なのに外は真っ暗だ。一段と寒いし、息も白くなりやが
った。

…… 思えば。去年は楽しかった。

亜夕と白亜が話しかけてくれなかったら今頃『友達』じゃなかつ
たかもしれないし、俺は今頃独り^{ひと}だった。冬休みもいつまでも外に
出ずにゴロゴロしてただろう。

亜夕達には感謝しなきゃな。今年も全力で二人をサポートするか。

「今年も楽しくなりそうだ」

今年も、去年と同じかもな。（後書き）

お待たせしました、新年シリーズ2です。もう新年と言える日ではないような……。思えば私の更新っていつも遅いような。時間かけすぎているような。

新年シリーズの続きなので、大分短くなりました。8000文字以上書いた事のある私。それが今回はきつと4000でしょうか。それにも満たないかも。

私的には8000文字以上書きたい私ですが、どうにも時間がとれないので。

一般的な小説は、オンライン小説よりもっと文字数がありますからなるだけ文字数を多くしたいのですが私の力量不足です。描写をもっと入れたほうがいいのか。

そして皆さん！

ロリシヨタ！ がアクセス数10000に近づいています！一万ですよ、一万。……いや、まだまだ上を目指したいのが山々なのですが私はこれだけでも喜んでしまいますし皆さんに何とお礼をしていいのやら。

とにかく、ありがとうございます！

では、これからも応援よろしくお願いします。次の目標は文字数8000を越える事です。

遅れましたが、明けましておめでとございます。あれ、もうそんな日じゃない？

ではでは。

黒崎朱音と俺の恋日

あつという間に冬休みが明けてしまった。

亜^{あゆ}夕^{はくあ}と白^{はく}亜^あと、白^{はく}亜^あのお兄さんとの新年パーティーを楽しんでから徹夜で宿題を頑張ったが正解率は低いだろう。まあ、良い。宿題は『やる』だけだし、やればいいだけだし……提出すりゃあいだろ。

今日は冬休みが過ぎて始業式を迎えてから三日目の朝のHR。冬休みの長つたらしい宿題を先生に提出して、そこで先生から「大神^{おおかみ}くんからお知らせです」ときた。

だるすぎるので机に突っ伏していた俺だが、生徒会役員の亜夕がHRで黒板の目の前に立つという事は生徒会がまた何かを企画したという事なので、とりあえず寝ないで聞く事にした。俺がゆっくりと体を起こしていると、一番後ろのドア側の席の亜夕が体に合わない大きな椅子^{いす}（亜夕にとってだが）から立ち上がり、ツカツカと黒板の前まで行く。

それまでに女子がキャアキャア騒いだりする。亜夕の人気度は半端ないな。その亜夕の彼女である白亜が一番騒いでいるけどな。

先生の教壇を勝手に占拠し、皆の前にズンと立つ亜夕は凜々しい。先生、教壇の件でツツコミは入れないんですか。

「本校にてバスケットボール大会を行う予定だ。皆、聞いてくれ」
「おー！」

こまみにこの雄^{おたけ}叫びはクラスの皆のものである。亜夕の威力は絶大。

「えー、生徒会が企画したバスケットボール大会だが、トーナメント戦になっていて、クラスで幾つかのチームに分かれて戦うという事になった。それで今日の学活の時間にもチーム分けをしたいと思います。自由に組んでもらっても構わない。ただしそのチームには必ずバスケット部所属の生徒を何人が加え、バスケの練習タイムにはその

所属生徒に教わってほしい。練習期間は決まってるが……」
決まってるのかよ。

「とりあえず、しっかり参加してほしい。いいな！」

「ハイ、亜夕さん！」

こまみにこれも俺以外の全員の台詞。某有名怖い系テレビの台詞を皆は真似してよく使うのだ。またも亜夕の威力は絶大。

……バスケ、かあ。

中学時代には体育のバスケの時間に顔面でボールを喰らって笑われた事があるつけ。未経験者なのに皆は容赦ないプレイをしてくれたな、うんうん。俺は全くのバスケ経験無しだ。他のスポーツは得意だったりするが、バスケになるとトコトン駄目で、苦勞する事が多々ある。

亜夕は先生を無視して皆と一緒に雄叫びを一通りあげてから席についた。先生はこういう事に慣れてしまっているらしく、もう何も注意しない。むしろ亜夕を可愛がっている。それは教師として良い事なのだろうか……。

そういえば亜夕はチームには必ずバスケ部所属生徒を入れるって言ってたな。どうせ俺と白亜と亜夕で小さなグループができるが、その中にバスケ部の生徒が入ってくるっていう事だよな。このクラスに奴が入るんだが、一体亜夕と白亜は誰をセレクトするんだろうな。

白亜は女子一人だと可哀想だよな。女子を入れたほうがいいかもあ、でも白亜って以外とそういうの気にしないよな。男子には人気あるし男子慣れしてそうだし。

男が来てもウザいだけかな。熱血野郎が来たりしたら困るぜ。マイワールドに入っていると、すぐさま先生が定規で頭をペシんと叩いてきた。当たり前か。

「いたっ」

「アオくん、一時限目は数学ですよ。ボーっとしてないで用意しな

さい」

「先生までアオって呼ぶんですね……俺の名前は蒼そうですつてば」

「知ってるわよ。でもアオのほうが面白くて可愛い名前じゃない？」

若くて綺麗な先生だ。独身らしい。

先生はロングヘアーを揺らしつつ、ニコリと微笑んで教室を出てった。

が、おいおい、名簿を忘れているぞ。

「先生ー、名簿忘れてますよー」

学活の時間になった。数学や古文やらを適当に受けてからの学活の時間はとても眠いのだが気にしない事しよう。眠さなんてすぐに消えるさ。

時間が余ったらバスケの練習をするらしいので、俺達はジャージに着替えた。体育館でチーム分けを行うのではるばる此処へ来たという事である。ちなみに今は一年が此処を陣取っていて、他の二三年は授業中だ。

三年生は受験のため、やりたい奴が参加というシステムらしい、二年と俺達一年は強制。

と、説明してくれた亜タが俺の前へいきなり来て、来るなり「ゴールにボールが入らなかつたらおまえのせいにするからな」と言ってきたのはその時である。

俺とチームを組みたいという事だろう。こういうチームになるのは知っていたし、別にイヤではないから反論はしない。

亜タの後ろに白亜がくっついていて。白亜も俺のチームに入るんだな。

「チームを組みたいっつー事だろ？ 反論はしない。『使命』だし

な」

「うんうん、アオも大分成長したな」

亜夕が一人で納得し始めた。

そんな亜夕の後ろで白亜はもじもじとしている。ん、どうしたんだ。

「白亜ね、バスケ苦手なの。一度もシュートした事ないし、ボールキャッチできた事もないし……」

「そ、そうなのか」

「うん。だから蒼くん、よろしくね」

「あ、ああ。でも俺もバスケって苦手だし、専門用語とか知らねーしなあ」

白亜の役にたてない事は非常に残念である。畜生、バスケくらいなんでできないんだ俺。……まあ、俺を責めても仕方ない。バスケが得意なバスケ部所属生徒を一人でも入れりゃあ良い。実際必ず入れるというルールだし。

「あ、えっとね、白亜がバスケ部の人誘ったんだ。男の子だと男の子が多くなっちゃうから女の子を。駄目だったかな？」

「白亜がそういうならオレは別に性別を気にしないから」

「亜夕に同意」

すると俺達の意見に白亜はニコリと微笑み、後ろを向いた。「朱音ちゃんあーんっ」白亜は確かに女子を誘ったらしい。朱音という女子という事は……

「ボール持ってきたよ。チーム決まったところから練習していいって。うちの体育館広くてよかったね。……あ、えっと、亜夕さんと

白亜は私の事知ってるかな。黒崎朱音です。よろしくね」

「あ、よろしく……」

知らない筈がない。彼女は黒崎朱音くろさき あかねだった。

黒崎は、新鮮な空気が沢山つまってバウンドしやすいボールを持ってきた。練習する気満々だ。

黒崎朱音について説明を入れようと思う。

黒崎朱音は、バスケットボール部所属生徒。俺と亜夕と白亜と同じクラスの美少女だ。成績は学年の中でのトップクラスにいつでも部位し、テストでは高得点が当たり前。その上美少女ときたもんだから、コイツは天然記念物でも良いんじゃないだろうか。肩までの髪はサラサラな黒い髪で、最近の女子達のように染めたり、飾ったりという事は決してない。美少女、成績優秀それプラス運動神経抜群。ヤバイ、天然記念物として本格的に保護した方がいいのかもしれない。

黒崎は他の男子にも人気がある。それでもロリが有力になってしまうのか白亜ファンクラブ会員のほうが多いのだが、黒崎ファンクラブ会員の量も負けてはいない。黒崎は自分のファンクラブが設立されているという事に全く気付いていない。天然記念物じゃなくて本物の天然か？

でもそんな天然さんだとしても、俺のタイプだということに変わりはない。スポーツをやっているときの彼女はとても可愛くてありのままの『黒崎』というかんじがするし。スポーツで彼女が得意なのはバスケットに限らずソフトボールでもテニスでもマツト運動でも何でも来いらしいじゃないか。一番得意なのはどうやら球技系でっつておい。

なんで俺はこんなに黒崎について熱く語ってんだよ。今はバスケの練習だろ？　それが優先だろ？

「……………」

無言になる。手の汗がひどいことをい今更ながら悟る。

あー、もしかして、俺、さ、

黒崎の事、

「蒼くうーんっ、早く早くー！　練習終わっちゃうよ」

白亜の声がかかってきた。

どうやらすっかりお得意のマイワールドに入ってたらしく、白亜達とたいぶ遠ざかっていたらしい。俺は早めに歩き、白亜達の所へ戻る事にした。

「ごめんごめん」

慌てて戻ったのにも関わらず亜夕が「トロい奴め」と言ってきた。
短気だよ、お前。

どうやら、大きく広がって円を作り、パス練習をするらしい。

黒崎の話によるとバスケットでパスというのはとても大切で、パスができていないとバスケットの試合中困るらしいのだ。「まずは基礎」という事か。

黒崎の言うとおり、いきなりシュートの練習ってのはいけないよな。亜夕がシュートの練習だシュートの練習だと騒いでいたがやはり基礎からチマチマと。

黒崎の言うとおり、パスの練習をしつかりと、

……って、ちよつと待て、俺。さっきから黒崎黒崎黒崎黒崎黒崎うるせえな。

「いいい、皆。知ってる人も居るかもしれないけど聞いてね。パスの時っていうか、ボールを渡したりする時は目の前で手で三角を作りまゝす。そうしたら押し出すようにい……投げるっ」

黒崎の「投げるっ」の台詞と同時に、ボールは亜夕に投げられた。
亜夕はボールをキャッチした。

「よっ、と」

「そうそう、キャッチもしつかりー。亜夕くん、白亜に投げてみて？」

亜夕は小さい手で円らな瞳の前で確認するかのように三角を作ってみて、ボールを持って白亜に軽くパスした。彼氏のパスを微笑みながらキャッチするのが白亜。

白亜がボールを持つとボールが大きく感じられる。「うわふっ」とかなんとかいいながらダブダブのジャージの袖を揺らして、しっかりとボールを抱き締める。抱き締めていいのか？

「上手上手ー。三角、忘れないでね。それじゃ、白亜が蒼くんに」
「……えいっ」

白亜が投げたボールはテンテンテンテンと五回バウンドした

がちゃんと俺の方へたどり着いた。ボールを投げた時の白亜が可愛らしかったので思わずニヤケそうになったが、ニヤケたらニヤケたで亜タ「すっこんでる幼児マニア」とか言われそうなので抑えておく。

「白亜、上手い上手いー」

え、良かったのか、アレでも。

「じゃ、蒼くん」

自分に向かって投げろという事か。黒崎がチヨイチヨイと手を動かして、ボールを投げるように指示した。投げるしかない。

だけど、なんかドキドキするのは何故だろう。たかが女子にボールを渡すだけなのに、パスするだけなのに何故か鼓動が早くなるのだ。

……ありやりや、俺、どうしちゃったんだろうね。

仕方がないから言われた通りに手で三角を作って投げる。白亜よりは綺麗に相手にボールが渡った。バウンドしてないし。

おずおずとボールを投げた俺に向かって黒崎はニツコリ微笑んでボールをキャッチする。「うんうん、皆上手だね！ 練習は要らないかな？」向日葵ひまわりのように明るくて可愛い笑顔だった。白亜とは違う笑顔。

参ったな、これからの学活が楽しみだぜ。

「よ、亜タ、何ボーっとしてんだ？ 限定じゃないけどメロンパン喰いたいとか言ってただろ？ 早く行こうぜ。金が無いとか？ だつたら奢ってやるよ」

授業が終わって食事タイムになったところである。

余程授業がつまらなかったのか亜夕は机にキスでもしているのか
と思ってしまう程の体制で突っ伏していた。突っ伏してるなと思う
が早いが俺に反応し、体をダルそうに起こす。

白亜の姿が見あたらないが？

「白亜は何処だ？ アイツもメロンパン喰いたいって言ってたよな
限定のメロンパンがでるのはもうすぐだな。その日は奢ってやるか。

……白亜は？」

話が反れてしまったので二回訊く。

「……トイレ」

「トイレか、そうか。じゃあ待っててやろう。一人にするのは可哀
想だしな、ははは」

「……………」

何故か亜夕が冷たい視線を俺に送ってきた。かーなーり、冷たい。
ダルそうに立ち上がって亜夕は下から俺を見上げてむすーっとし
た仏頂面を見せる。「お前、変だぞ」バスケ練習の時からおかしい
な、と付け加える。

「おかしい？ 俺が？ なぁに言ってるんだよ、亜夕。いつもの俺だ
ろ？ あ、白亜来た来た。早く来いよ、廊下で待ってるから」

「そうじゃなくて」

「え？」

「なんかいつもよりお前、明るいぞ。優しいのも含めて。おかしい。
キモい。ウザい」

「何を言っんだ、亜夕。俺は健康だ。ささ、早く食堂行こうじゃね
えか」

「……はあ？」

「なあんか蒼くん、変だよ？」

俺が奢ってやったプリンとメロンパンを交互に食べながら白亜がそう言ってきた。思うけど、白亜の昼食っていつも菓子パンだったリスイーツだったりする気が。

俺は首を傾げた。でも、ちょっと機嫌が良いのかもしれないけど俺は至って普通である。

「機嫌が良すぎてキモいぞ、お前」

「ええ？」

機嫌が良すぎてキモい？ どういう事じゃ。

「ええーっと、ロリとシヨタのお二人様？ 言ってる意味がわからないのですが……」

「もうっ、蒼くんの馬鹿あつ。蒼くんって結構格好いい方だと思うよ？ うん、実際女子も格好いいとか言ってるしね？ でもさあ、なんかニヤニヤしているというか、顔赤いというか、……へ、変……」

「白亜に異議は無し。お前……どうしちゃったんだ、アオ！ 今だからこそ言えるけど、お前、結構普通の男子よりはイケてる方だったのに……！ あああ、キモい、キモい、顔赤い顔赤い何に照れてるんだコイツうううううううう！」

「キモいキモい言うのは人権がどうのこうので良くないぞ、亜タくんや。それと、口の中のメロンパンを人に飛ばしてこないよーっに」
「は、話し方がいつもの蒼くんじゃないよう！ なんか、バラ色のオーラが漂ってる！ う、うわああああああん！」

「席を変えよう、白亜。こんな気持ち悪いバラ野郎の傍にいたら感染するぞ！」

亜タと白亜は席から立って席を変えようとする。え、え、え、何？ キモイって何？ バラ色のオーラ？ な・ん・じゃ・そ・りや。この台詞の後に「つけてもいいぜ？」

「う、うああああああああん！ うああああああああん」
どういうわけか白亜が泣き出してしまった。嘘泣きではない。大粒の涙が瞳からポロポロと溢れ、顔を擦りながら泣く白亜。そんな

彼女を見て野郎共が集まってきた。泣いてから数秒の事。

ドヤドヤと群がり、「白亜たんどうしたの?」「白亜たんつ」などとはぎやがる。この野郎共白亜のファンクラブに所属しているな? クソ男達め……。

元々二人を守るとというのが俺の使命だが、俺は白亜を『女の子』として守ってやらなければいけないような気が何故か(本当に何故かなのだ)して、群がっている野郎共の中に入り、白亜の前に立った。

「よせ、お前達のような豚が群がると白亜がもつと泣いてしまうだろう。もつと紳士的な振る舞いはできないのか?」

「な、なんだコイツ……」

「一年の『アオ』って奴か?」

「ああ……皆さん僕のことを『アオ』って呼ぶんですね。僕の名前は顔面蒼白の蒼と書いて『蒼』と読みます。以後、お見知り置きを」

「顔面蒼白? なんじゃその笑えない冗句は」

「こんなやりとりをしていると亜タが後ろでジャンプしながら、「アオ! 何やってるんだ! アホか、お前はあああああつ! 白亜ファンクラブに何か言うなんてお前はホントに馬鹿すぎて、」

「ジャンプする亜タくん可愛いー! 今度こそ我が新聞部のインタビューに答えてもらうわ!」

「……へ? あ、ちょ、放せ! 放せえええええつ!」

亜タに何が起こったのかは解らないが、新聞部一同に持っていていかれてしまったのだろう。可哀想に、亜タ。研究材料になるだろうな、きっと。だが哀れに思うのはやめよう。俺の行動に指図する者は居なくなった。

とりあえず野郎共を散らさせなきゃな。白亜が怖がってしまう。

俺は一步も動かなかった。シーンと沈黙している間途中で俺は「何やってるんだ、自分」とか思うが俺の行動は正しい! レディーを泣かせる奴は許せん!

「貴様等、白亜ファンクラブ会員のくせになんて野郎共だ！ 白亜ファンクラブに所属するならもつと紳士的な振る舞いを見せてみる！ 見る、このごんまりとした白亜を…… お前たちが汗ばんだ手を差し伸べるせいで白亜がすっかりドン引きではないか。いいか！ レディーの心配をする時はだな！ 優しく手を差し伸べる！ 大人数で行かない事。せめて行くのであれば順番で！ そう、レディーという物はだな、儂い光のような物で小動物のような存在！ 貴様等レディーをなめんなよおおおおっ！？」

ここまで言う和白亜ファンクラブ会員達は諦めるらしい。そして自重したらしい。自分の間違っていた行動、そして汗ばんだ手に。皆自分の手を見ながら退場していく。当たり前ではないか、ふははは。ズバリ俺の勝利だ。

「ふはははは、ふーっははははははは、」

「何、何があつたの？」

刹那。

俺の雄叫びをかき消したのは白亜ではない他の女子だった。俺と白亜ファンクラブ会員達が起こした騒動に気付いたのだろうか。まあ、皆気付いているかもしれないが。

その女子は肩に届くくらいの髪の長さ。こまみに、黒くて艶やかだ。円らな瞳。体育系と断定できそうな体つき。そして更にこまみに余計な事として貧乳。野菜のサンドイッチを持って、去っていく男共をポカンと見つめていた。

「く、く、くくくくく、黒崎！」

くろさき あかね

黒崎朱音。学活のバスケット大会練習の時にパスを教えてもらった心ときめくキュートスイートエンジェル。そのキュートスイート。エンジェルは俺に向かって疑問符を沢山投げてきた。

いったい何が起きていたの？ みたいな。とりあえずとつてもキョトンとしていて、……というよりは俺にひいているのかもしれない。

ビククリしているのは俺だ。なんか今目覚めた感覚なのだ。今ま

で夢を見たいような。

「は、白亜、どうしたの？ ファンクラブの会員達がまた？」

黒崎はそう言いつつまたキョトンとしながら白亜に問いかけた。

白亜は涙目で自分よりもずっと身長が高い黒崎を見上げる。「う

ん……。あ でも、蒼くんが助けてくれたんだよっ」その後白

亜は「でも白亜何もされてなかったような」と付け加えた。

「へええ、蒼くんってすごいんだね！ 白亜ファンクラブの人たち

は白亜の事が大好きなんだけれどちょっと強引で私も嫌かな。蒼く

んはすごかったのかもー。私はさっきの事、あまり知らないど

「あ、おお、そうか」

おどおどしていた俺は、

「ごめん。なんか騒いじまって……。俺も自分で何してたか解らないんだ」

「蒼くん、もうその事はいいよ。白亜、嬉しかったよ」

「いやはや、一件落着く。ではでは私は昼食をとってきまーすっ。

じゃあ、後でね」

「あああああ、ああ、うん、また」

なんでか知らないが「はあ」とため息が出た気がする。

その後、フラフラと亜タが帰ってきた。フラッシュを沢山浴びてインタビューを受けていた事は言うまでもなく。

授業も適当に受けて、ダラダラと帰宅の用意をし、さいならの号令がかかり皆が机を動かしはじめた時、白亜が俺に何やら小さい手紙を渡してきたのはついさっきである。白亜によると、「今見て」だそうだ。紙をチラッと見る。中には白亜独特の可愛い丸字で、『お掃除が終わったら、体育館裏に来てください』。と書いてあった。

「……………」

無言。当たり前だろ。

え、何、これ。まさか愛の告白だったりしないだろうな。困るぜそれは。第一白亜には亜夕という生意気シヨタ彼氏が居るだろ？

「……愛の告白、じゃないよな」

当たり前だ。亜夕と白亜は昔からの仲だそうで、あのバカップル加減はとてでもないが言い表せない。亜夕の白亜に対する甘さと言い、白亜の亜夕に対する惚れ度と言い。

どうしたんだろうな。

黒崎朱音と俺の恋日（後書き）

新キャラです……！ 黒崎朱音です。

実を言うと朱音編が終わったら朱音をレギュラー化して、また新キャラを予定してます。予定、ですけどね。

16000文字近くなりました。まだまだ短いなあ。

白亜式・居眠りチョコレートレスン

白亜の呼び出しに、疑問。

「えーと、白亜？ 俺を呼び出したのはいいけどさ、用件って、何？」

おずおずと挙手して、そしておずおずと問いかけてみた。

白亜の事だから何か理由があるのだろう（と行っても呼び出すくらいだから理由は必ずあるのだが）。こちら真剣に話を聞いてやらねばならない。

何か、心配事とか悩み事が在るのだろうか。女の子だし、思春期だしな。心配事や悩み事が一つや二つ在ったところで何もおかしくはないし。

冷たい風にふかれながらも少し沈黙。小柄な白亜は下を向いたままふると震えたので、俺はブレザーをかけてやった。

ブレザーをかけてやると、沈黙していた白亜が小さく口を開く。

「あのね、蒼^{そう}くん。お話というより訊きたい事があるの」背伸びして小声で耳元に囁いてきた。白亜の甘い吐息がかかるのが解る。

「訊きたい、事？」

「うん」

「何？」

「うーん……」

何が『うーん』なのか解らないが、多少唸った後彼女は俺にぎゅーっと抱きついてきた。寒かったのだろう。

白亜は身長が低いために白亜の頭が来るのは俺の胸と腹部の間だった。

「白亜？ あ、う、あ……」

「寒いのっ」

「亜夕に見られたらどうなるか」

「……止めとく」

パツと離れ、白亜は俺を見上げた。

「あの、唐突だけどねっ。言うよ？　言うからね？　……ああ、もう言っちゃうもん！　……蒼くんって、好きな人居る？　居るよね？」

「え」微妙に一文字だけ発した。白亜の台詞、疑問に何て答えればいいのか解らない。だってこんな事いきなり聴かれたら困るだろう？　好きな子か。今まで俺は亜夕と白亜の『お世話』で忙しくて恋をする暇などなかった。十分青春はしていた（多分な）だろうし、それなりにキツくも楽しい毎日だから自分の恋愛なんてどうでもいいと思ってた。実際、俺じゃあまともに恋愛なんかできないだろうし。あ。でも。

よくよく今日を振り返ってみると何かが違った気がする。甘いかんじ。それは自分でもよく解らないのだけれど、とにかく今まで感じた事のない感情だったと思う。いつもの「楽しい！」とかじゃない、別の感情。

「えーと、」

「白亜、見ててわかるよ」そう言って白亜は俺を見上げる。「朱音ちゃんの事、好きなんですよ」

白亜の満面の笑み（笑みというよりは「にまーっ」だったかもしれない）を俺は一生忘れられないだろう。

白亜が満面の笑みと共に放った台詞は聞き捨てならねえ。いろんな意味で。俺は『その台詞』に即座に反応していた。

「え？　……あ、おあうあわあああああっ！？」

考えてみれば確かに。黒崎朱音という人物は知っていたは知っていたが、いざ詳しく知り合って行動を少し重ねただけで、黒崎と親しくなった俺はその後フイバー状態だったかもしれない。有頂天？　「バスケ練習の後蒼くんなんだかおかしかったし……あ、でもファ

ンクラブの強引な人達から助けて？ もらったのは嬉しかったよ。
ありがとう」

白亜は微笑んで、

「というか、その反応は凶星だね？ 別に白亜は蒼くんが朱音ちゃんの事好きだから嫉妬とか、駄目だとか言ってるんじゃないって、その、なんか寂しいなって。あー、うーん、寂しくない寂しくないよっ！ 蒼くんの事精一杯応援するからねっ」

「あ、う、おお」

俺が黒崎の事好きだっという事は確定されてるんですね。わかります。

「蒼くんの事精一杯応援するから、ほら、白亜とアユの事も今以上に応援してほしいな、なあんで」

「それはわかってる。俺の『使命』じゃねえか」

「……そっか。良かった！ じゃあね、お願いがあるんだけどいいかな！」

白亜が「ついてきて」というので俺は言われた通りにする事にした。

何処に行くのかはサッパリだが、学校の門から出ずにまた校内に入ったからきつと学校に何か用があるのだろう。

亜夕関連か？ と思ったが亜夕は生徒会主催バスケット大会のミーティングがどつたらこつたらで生徒会室に居る筈だ。ちなみに会議中は生徒会の生徒以外入れない事になっている当たり前だが。

白亜は自分に合わない少し大きめの上履きをキュッキュッと鳴らせながら歩いている。そのごんまりとした白亜の後ろについていく大きい男が俺だ。別に俺は特別デカいというわけではないが、白亜と並ぶと俺がデカく見えてしまうという仕組みだ。

キュッキュツと二人で歩いていると（正確には白亜が音を鳴らし

ている)、白亜が後ろを振り向きながら、

「もうすぐバレンタインでしょう?」

と俺に呟いてきた。

「バレンタイン?」疑問に思ったがあまり深追いしない事にする。
もう、答えが出そうだったのだから。何故なら。

……調理室、到着。

ははあ、此処でバレンタインについて何かをやるうという事だな。
バレンタインもうすぐだっけ? 全然先のような気もするが、まあいい。

調理室の鍵は借りていたのか、白亜が鍵をポケットから取り出し
何やらガチャガチャとやりだした。

「開かないーっ」

「わかったわかった、貸せ貸せ」

白亜の代わりに俺ががちゃりと鍵を開けた。忍び込んで良いのか
ね。

白亜は、扉が開くと同時に扉の側の電気をパッとつけ、ルンルン
で内ポケットからエプロンを取り出した。女子の内ポケットって下
に在るんだよな。男は胸のほう。

白亜はエプロンを着込みながら、そこらへんに突っ立っている俺
を見た。「蒼くん、後ろリボン結びして」それには答えるしかない。
「はいよ」

白亜の後ろに屈んで、赤いエプロンのリボンをきちんとリボン結
びしてやった。しかしまあ、思った事としては白亜って細い。両手
で輪を作ったらすっぽり入りそうなウエストだぜ。

できそうだったので、試しにやってみた。俺、危ない。

「はわあっ!?!」

「細! 死ぬぞお前! 食ってんのかよ!?!」

俺の台詞とは裏腹に、

「蒼くんのバカアホエッチ! いきなり何すんの!?!」

「あぎゃふうつ!?!」

突き飛ばされてビンタを喰らった……！ 当然の仕打ちだ。

ボールなどを並べながら、俺達はしばらくだべった。

「今日呼び出したのは朱音ちゃんの事で訊きたい事っていう事も在ったんだけど、実を言うところ蒼くんはチョコ作りを手伝ってほしかったんだあ。一人じゃできそうにもないし、誰か見てくれてないとチョコを頭から被って失敗しそうで。あ、調理室の事は調理の先生に許可もらったんだ。七時までなら使っていていいって。途中で終わっちゃったならまたやりに来てもいいからって。

当然だけど、チョコ、アユにあげたの。白亜はお料理とか苦手だから去年は市販のチョコだったんだ。それでもアユは美味しいって言うてくれたけど白亜は手作りを渡したいなあって」

乙女の純粋な恋心って奴ですか。

「ファンクラブの奴等に嫉妬されたりしないのか？」

すると白亜は苦笑して、

「それそうだねー。あまったら抽選であげようかなっ」

抽選！？

抽選って何だ、と思った俺。白亜はそろそろ作業を始めていて、テーブルの上に用意した板チョコを包丁で細かく切り始めた。

「おいおい、危なっかしいぞ。手は左手は丸くしねえと指切っちゃうぞ」

「わかった。……あ、そうだ。蒼くんお湯沸かしてくれる？ 白

亜お湯恐いのー」

「オーケーオーケー」

俺の指導通りに白亜はチョコを切っていた。真剣に切っている白亜の姿は可愛くて、もし彼女が妹だったり俺の彼女だったりすれば今すぐぎゅっと抱き締めていたかもしれない。とにかく言いたい事としては熱心で健気な白亜が可愛いものだ。

……亜夕、不味いとか言わずに喰ってやれよな！

鍋にお湯を入れて、沸かす。沸くまでに時間がかかるので白亜の作業を見ている事にした。

「……………」

「……………」

「……………」

「どうした？」

「指切っちゃった」

「……………」

おい。

「ちょ、おま、気をつけろって言っただろ！ チョコ真っ赤になるぞ！ お湯で冷やして、っってお湯じゃ冷えねえよ俺馬鹿野郎日本語学べよ！」

「心配しなくて大丈夫だよ。傷浅いし」

「絆創膏くらい貼つといた方が良くないか？」俺が心配してポケットを漁り、絆創膏は無いかと探していると白亜にその手を止められた。

「本当に大丈夫だよ、ね？ 痛くないしアユが心配しちゃうもん」

……ほほう、恋する乙女は無敵ってか。

無敵というよりも、白亜なりに苦労して健気に亜夕の為に頑張っているのだろう。絆創膏を貼った指を見せた方が亜夕が心配してくれてそこから何か壮大なラブ・ストーリーが始まるのでは？ と思うが白亜は心配されるのが嫌なのか。じゃあこれから助けてやらねえぞ。あ、違うか。

何かのネタを脳内でぼざいてから、白亜の行動を見ていた。小さい、白亜の手は熱心に動く。たまに指を真つ二つに切りそうな時もあるが白亜は困難を乗り越えチョコを切っていくのであった。と、くだらないナレーターは必要ないな。

トン、トン、トン、トン、トン、トン、トン、トン。

ゆっくりながらもリズムカルな音である。眠くなりそうだが、眠

らない。リズミカルな音で眠くなる時つてないだろうか。そうだな、例えば俺は時計の針を音を聴いてるだけで眠くなるぜ。

細く千切りに切られていく度に、チヨコの香りが鼻孔を擦る。アロマテラピー効果付きなのだろうか、リズミカルな音と組み合わせるに眠くなったので、さりげなく寝る事にした。壁に寄りかかる。すまん、白亜。

……だが、俺の睡眠を妨げるかのようにさつき沸かした湯がもう沸いてしまった。多少グツグツと音を鳴らしている。そんな音を白亜はすかさずキャッチ！　すぐさま俺に「蒼くんお湯止めて持ってきてー」と呼びかけた。

お湯を止める？　火を止めるのではなくて？　まあいいや。火い止めてやるうぜ。

火を止めて、用意してあったボウルにお湯を注ぐ。そして白亜がそのお湯入りボウルの上にボウルを更に重ね、チヨコを入れていった。そして、ヘラのような物でかき混ぜる。

「実は、これ見よう見真似なの」「そうなのか。ちょっとそんな感じした」「うん。お湯の温度とか適当だしチヨコの切り方適当だしー」

ヘラでチヨコをかき混ぜながら、白亜は「てへ」と笑った。

全国の女の子達！　結局は愛なんだぜ！　市販のチヨコでも、愛が伝わってくりやあ男は嬉しいってもののさ！　……演説を続けなかったが、やめておこう。永遠と続きそうだしな。

さて。

白亜に「アルミのカバー的なとつてー」と言われ、アルミのカバー的なものを取ってやった。名前はアルミのカバー的なのでいいのか？　男だから解らん。その命名・アルミのカバー的なものの中に白亜はボウルからチヨコを注ぐ。アルミ（以下略）は結構沢山あり、チヨコがその沢山あるアルミ（以下略）の中に入っていく。作り方が心配になるが大丈夫大丈夫。多分。

「えつとー、何かトッピングトッピングー。先生がね、コレ使つて

いいですよ、って」

わーお、気が利くう。

星形の小さな金箔きんぱくだった。その星形金箔を白亜は丁寧にスプーンで掬い、一つ一つにパラパラっとかけていく。そうしたら白亜はポケットからもう今にも溶けて出てきそうなチョコスプレーを取り出す。チョコスプレーか？ まあいい。問題はチューブの中のドロドロのチョコ（推定、イチゴ味）だがそれ以前に順序ちがくね？ 俺が言いたいのは、普通何かチョコスプレーで描いてから金箔だろ、という事だ。まあそれも置いておきまして。

ハートを描いた後、白亜は銀のトレーにチョコ達をのつける。後は家庭科室の冷蔵庫を勝手に使わせていただいて勝手に冷やさせていただいて勝手に待たせていただければ完成。

チョコの完成を待つのはそれぞれ家かな。何故なら、時刻は家庭科の先生と約束していた七時を少し過ぎていたからだ。チョコ作りで、俺達はこんなに時間を費やしたのだ。

「白亜、後片付けしたら帰ろうな。お前の家族心配するだろ。……特にお前の兄ちゃんが」

「そうだね」

白亜はエプロンを外しながら、そう言った。すると今度はツインテールを僅かに揺らしながら、

「蒼くん、ありがとう」

と、微笑んだ。

……暖房がきいてて、熱い。

白亜式・居眠りチョコレートレスン（後書き）

空蝉さんや彼方さん、多いっ……！ という事で改名せざるを得ませんでした。もう改名は嫌いです。嫌いですっわーん。泣きたいです。というわけで苓北かなたさんになりました。以後宜しく願います。

おお、アクセス数が、凄い、凄いっ！
新キャラの朱音のおかげでしょうか。異様に前回の「2人＋1人朱音」のアクセス数が高くて恐いです。

ところで、今回はバレンタイン編突入です。バレンタイン編と言いましてもきつと短いのですが。

では、次のお話で。

あとがきでお会いしましょう！ いや、私とあとがきでお会いできる方は少ないと思います。此処まで読んでくれたあなた！ 次も楽しみにしていてください。

コメントをくれればいつでも返信します。あ、自重してきますね。

2月バレンタイン・亜夕、死ぬな！

あつという間に、バレンタイン当日になった。

調理室の冷蔵庫に勝手に放置させていただいたチヨコレートは冷蔵庫から回収し、今は白亜^{はくあ}の鞆の中である。溶けそうだが、溶けない、よな？

チヨコレートが自分の出番を待っている一方、白亜はバレンタイン当日という事で緊張しているのか亜夕を何故か避けていた。理由を訊くと、「恥ずかしいんだもの」とのこと。ふむ、恋する乙女つてやつね。

んで、白亜が亜夕を避け続けてもう放課後になってしまったらけである。白亜の計画では放課後にチヨコを渡すとのことだったが、大丈夫だろうか。間に合うのだろうか。

頭の中にはチヨコレートを渡せなくて困っている白亜の様子が浮かび、廊下掃除が遅々として進まない。白亜の事もあるけど、水道掃除の黒崎がすぐそばにいるという事もある。

「……………」

このままじゃバレンタインが過ぎる。あ、いや、この話事態過ぎでんだけどさ。

せめて白亜の奴、亜夕と話すとかしろよな……亜夕も亜夕で困るだろうし。

モップを持つ俺の手は動かず、脳味噌だけいつもよりも活発に動いていた。今は掃除よりバレンタイン。白亜の事だ。

……ていうか俺は亜夕^{あゆ}と同じ班だが、亜夕が掃除をやっていない俺に対して怒る様子は無い。いつもは俺に掃除を任せていたのに今日は黙々とやっているし。皆どうしちゃったんだよ。

「アオ」

亜夕の事も考えていたら、亜夕が俺に話しかけてきた。

「な、なんだよ」怒るのか？

「そこ邪魔だからどけ。掃除ができないだろ」

「……………」

「どけ」

「あの、亜夕さ、」「何」「えっと、あの、なんで今日は皆おかし、」「知るか」

ドオオーン。心の中で寺によくあるような鐘が鳴った気がした。なんか、冷たくないか？ いつも冷たいけど変に冷たい。白亜のバレンタインのチョコレートに気づいてんのか？ そんな事ないと思うけどな。

亜夕は俺の足を巻き添えにしながらごみをチリトリに入れて、何処かへ行った。ゴミを捨てに行っただろう。

だんだん小さくなっていく亜夕をずっと見てみると、後ろからポンと肩に手を誰かにのつけられた。

「今度は何だよ……………」

苛々（いらいら）しながら後ろを振り向くと、水道掃除をしていた黒崎がそこに居た。黒崎は「ごめんね、いきなり」と俺に言ってきたので俺は「俺こそごめんな……………」と言っておいた。相手が黒崎だから。

黒崎は苦笑しながら亜夕の行った方を見て、また俺に向き合った。

「何か二人共おかしいね」

二人共というのは白亜はくあと亜夕あゆつの事だろう。黒崎も二人のどこかない異変に気付いていたらしい。

そこで、白亜のバレンタイン件は説明した。が、亜夕の事は全くわからないので「俺もわからない」とでも言っておいた。すると黒崎くろさき朱音あかねはあはの苦笑してから、

「そうだね、白亜、亜夕くんの前通り過ぎると顔赤くしてたし……………ふむ、これは何かあるなっ！ って私も思ってたんだけど、……………は

はあ、チョコレートを渡すのを躊躇^{ためら}っているんだあ。白亜の事は解ったけど、亜夕くんの事は解らないね。でもきつと、白亜が自分の事嫌いになったのかもと思ってげんなりしてたり……とかは、ないかな？」

「うむ、一理あるぜ」

「やつぱり、そうだよなー」

黒崎は自分の細い腰に手を当ててまた苦笑しながら溜息をつく、俺に向かって手招きした。こっちへ近寄れって事か？ あ、いや、でも、近寄ったら近寄ったらで、

「ところで蒼^{そう}くんっ。ちこうよれちこうよれ……」何故か小声の黒崎だ。

「な、なんだ？」

黒崎はニツと微笑んで、しゃがみ、近くに置いておいた自分の鞆^{さく}に手を入れて何かを探り、すぐにそれを制服のポケットの中に入れた。

「蒼くん、うちの学校はさあ、こういうの先生に見つかったらやばいんだぜえ。だから、ちよいと怪しいけどコレを受け取ってくれだぜえ」

「え？ お、うわっ」

強引にブレザーを掴まれ、すぐにそれは内ポケットに納められた。うぐあ、男子のブレザーの中に手は入れちゃ駄目だぜ黒崎っ。

俺がワタワタしていると黒崎は「家で食べてね。不味かったら捨てていいから。白亜とも仲良くしてくれだし、お礼だよ」と言っつてその場を去った。掃除終わったんだな。

……ところで、「家で食いな」とか「不味かったら」とかって、ひよっとしたら、

「……チョコか？」

コソコソと内ポケットの中身を見ると、それは可愛いラッピングのクッキーだった。チョコではないが、『バレンタイン』に男子が貰うべきの物だった。

「う、うは、貰った。……貰った……。天は俺を忘れてなかったやつふうふうふうふうふうふうふうふうふうふう！ 春だぜ！ 春が来たぜ！ 春が来た春が来たどこに来た！？ 俺に来た俺に来た蒼にキタアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

神様ありがとう黒崎ありがとう！

僕は毎日丁寧になります！

予想外なことが起きる。

毎日丁寧に生きます！ という事で、亜夕が取り残したゴミを俺は丁寧にチリトリで集め、そのゴミを捨てる事にした。

ちなみに廊下のゴミは教室のゴミ箱に捨てるのではなく、そのまま一回の総合ゴミ捨て場まで捨てに行く。階段を結構降り、裏の外に出る校庭のすぐそばに在るのだが、何しろ一年の廊下から此处まで遠くてしんどい。……はっ、いけねえ！ 丁寧に生きないと……。ガシャガシャと緑色のチリトリの音を鳴らせながら階段を降りる。寒っ。寒すぎっ。この寒さは俺の敵だが、今となってはそんなふうでもいい。天は僕を見てくれるんです！

階段をかけおり、ゴミ捨て場へと続くドアを開ける。すると一気にぶわあつと風が来て「ぬおおお」と呟いてしまったが、ゴミ捨て優先。

「あれ」

いつもあまり人が居ないのに、今日はゴミ捨て場の所に誰か居る。この人も捨てに来たのかな。いや、なんかチリトリを持ったまま佇んでいるし……。ていうかやけにチッコい奴だな、おい。

と思っていたら。

「……亜夕」

亜夕だった。

俺がそう呟いた事には気付いていないらしく、ずっと前を向いていた。俺が少し角度を変えて、ちらりと亜夕の様子を伺ってみると、

泣いていた。

「……………」

泣いている亜夕なんて見るのが初めてだったから俺は同様していったんだろう。亜夕の涙は見てしまったわけでなんでか怖じ気付き、俺もそこで佇んで亜夕を見ていた。亜夕はたまにブレザーの袖で目を拭いたりしていて、俺の方を向く様子は全くと言っていい程ない。

「亜夕」

さっきよりも少し大きな声でそう言ってみた。

すると亜夕はまた勢いよくゴシゴシと拭いて、さっきとは違う方向だが俺の方向ではない斜めを向いた。そんな亜夕の近くに寄り俺は、

「おい、袖で拭くなよ。汚ねえし痛てえだろ。ハンカチ貸すから、」
「触るなっ！」

いつもよりも尖った、俺に対して拒絶を意味しているような大きな声。そんな亜夕の声を、俺は初めて聞いた。亜夕は俺の差し出した手をパンつとはねのける。

「お前だつて後からオレの事……僕の事嫌いになるんだ！ だって話しかけんな！」

「何の事だよ」

「黙れ！」

亜夕はそう叫ぶと、いきなりガクツと体を地面に落とした。

「亜夕！」

亜夕は倒れたままガチガチと震えて、「駄目だ駄目だ僕の事嫌い

になるんだ信用できないんだ寄るな寄るな寄るな寄るな寄るな
辛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い」と呟き始めた。

「あ、あゆ、」

目を痛そうにしている様子は無い。だが、頭を抱えてうなだれていた。

亜夕を助けたりするのが俺の使命なのに、俺は何もできずにいた。
「どこがっ、どこが痛いんだ亜夕」俺の呼びかけが聞こえていないのか亜夕は謔言たわ言のように何かを呟き続けていた。

あ、あ、あ、あ、えつと、

俺はパニック状態になる。人がこのようになるのを初めてみたし、
どのような事をまずしたらいいのかわからない。だが、とりあえず
俺は亜夕をお姫様だっこのような形で抱え、そのまま保険室へ運ぶ
事にした。

……こんな時に、白亜は何処行つてんだ。

俺は亜夕を抱えながら、まだ掃除中の先輩達がたくさん居るひん
やりとした廊下を全力疾走した。

「どけどけどけええええええええええええええええええええええー
っ！」

先輩達を押し退けながら走る。「今の亜夕くん？」だのと一瞬だ
けざわめきが聞こえた。

保険室は遠い。うちの高校は無駄にデカイ。走っている間に亜夕
の顔を見ると、亜夕の目は何も写していないかのように濁っていて、
ボーッとしていた。手はダランと垂れ下がっている。死んでない、
よな？ 息してるし……。

「亜夕、」

お前は……

「お前、どうしちゃったんだ！」

……どうしたんだよ。

大神亜夕と狩野亜夕

保健室に大慌てで着くと、保健室の先生は亜夕あゆつと俺に「ああ」と平然と声を漏らした。

何故か亜夕を見て納得した様子だった。先生は溜息をつく。「またなのね。蒼そうくんだったかしら。亜夕くんをそのベッドに寝かせてあげてくれる？」いつもの事のように先生は言った。

「ああ、あ、はい」

羽のように軽い亜夕の体を、妙にもふもふしているベッドに寝かせてちゃんと布団をかけてやった。ベッドに寝かせると、ボーっとしていた亜夕の目は閉じられる。安心したのだろうか。

すると先生は、

「白亜はくあは？」

「……今は、居ないです」

「はあん、バレンタインだから亜夕と顔を合わせたく無いとみた」
どんびしゃ。

「蒼くんは部活とか無いの？ まあ、見たところやってなさそうだしいいか。……蒼くんはさあ、亜夕と白亜と、仲良いでしょ？」

仲、かあ。仲が良いのかな。いつもコキ使われてるだけかもしれないけどそれなりに楽しいし、俺達は仲が良いのかもしれない。亜夕と白亜がどう思ってるのかは知らないけどきっと仲が良いんだと思う。

というか、保健室に来たのは亜夕の為なのにいつの間にか先生とダベリ大会を始めている。

「仲は、良いと思います。亜夕達がどう思ってたのかは知りませんが」

「ふうん」

ポニーテールを揺らして、何か紙に書いている様子だった。カツとボールペンの音がする。俺の診療かよ。

「私さあ、亜夕の小中学校で保健の先生やってたわけ。今も此処に居るけど。そんなところから白亜も居て、……うん、亜夕も変わり無しかあ。ところで蒼くんの話はよく白亜から聞いてたけど、蒼くんは二人の僕的存在しもへんというか、『使命』があるじゃない？ だったら、知つとくべきだと思うんだよね、亜夕の今の事も、昔の事も」

すると先生は携帯を普通に取り出し、電話をかけた。

「ああ、大久保先生？ 水川みずかわ居ます？ あのうちっこの。ええそうです、白亜です。保健室に至急来るように言っておいてください。

……ありがとうございます、では」

学校の電話使いましようよ。

「今白亜呼んだけど。それまでお姉さんとお話ね」

「……お姉さん？」

「文句あるのかな、蒼くん。私まだ三十路みそじ行つてませんから」

「ははあ」

「……亜夕と一緒に居て、今までこういう事あった？」

「こういう事とは？」

「いきなりブツブツ念仏みたいに何か言ったり、倒れたり、ボーっとながら倒れたり、吐いたり、暴れ出したり。暴れてんのはいつもかもしれないけどさ」

「俺はそういう亜夕を今日始めて見ましたよ」

すると先生は「ふうん」と呟いて、またカツカツと何か書き始めた。何か書いてる様子を見てなんだろうと思ってる俺に気付いたのか、先生は俺を見る。「癖なのよね。何かあると書くの。でも、亜夕について書いたのは久しぶり」そう言つて先生は書き続けながら、「今日亜夕どんな風だったの」と俺に問いかける。

「えっと、まあ、さっき先生が言つた事は全部……かな」

「はあん。……亜夕最近来ないし、今年入っても何もなかったから

安心していただけどなあ。当ててみせよう、原因は白亜だ。バレンタインなのね。はあ、参った参った。流石ガキの恋愛だよ。笑っちゃうね。二人は昔からそうだ。最も変わったのは亜夕だけだなあ」

「変わった？」

俺の発言を無視して、先生は、「白亜遅い」と呟く。腕時計を見ながら先生は、「亜夕はこういう子じゃなかったの。長々と昔話に入るけど、亜夕って大神家の養子^{おおかみ}なのよ。旧名は狩野^{かりの}亜夕^{あき}なんだけど。狩野のババアとジジイ、……ようするに亜夕の母さんと父さんね。狩野のババアとジジイは亜夕に暴力ふるってたのよ。中学一年くらいまで絶えてた。でもついに亜夕は大神家の養子になったの。蒼くん、大神グループくらい知ってるでしょ」

大神グループって……あの？

全然気付かなかった。

大神グループは大きな会社を世界に何件も持ってる。よくわからないがとやかく、すごいグループなのだ。

「大神グループの社長の家に養子として亜夕が、ね。あのデツカい家君も見た事あるでしょうに。白亜の家の目の前なんだからさ。……幸せだったと思うんだけど、アイツ、……亜夕は前の事を引きずってたわけ。だからたまにああいう症状に侵されちゃうの。私はいつもそれを見てた。強くなりたいたいから一人称を僕からオレに変えてみたり、態度も変えてみたり、バカだよね、ガキのくせに。白亜が居なかったら亜夕は多分今以上に崩れてたと思うよ。だから蒼くん、アイツを支えてやってよ」

「……あ、はい……」

知らなかった。亜夕の過去も、今の事も。それなのに俺は亜夕の事を知ってるフリをしていて今まで平然と亜夕を守ってた。馬鹿じゃねえの自分。いや、馬鹿だ。

悔しくて感情の半分がどこからこみ上げて来ているような気がした。思わず何かを叫びそうになり、ぐっと抑える。

……それにしても、先生は保健の先生だからと言って亜夕に詳しくすぎる。小中高と先生をやっているのも疑問だ。もうほぼ主治医じゃないか。

「あの、先生は、」

「失礼しまあす……」

タイミング良く白亜がドアから登場してきた。白亜はおずおずとした様子で保健室に踏み出す。「遅いよ白亜ー」先生が白亜に声をかけると白亜は更におずおずとして、「ごめんなさい……」と呟いた。そして顔をゆっくり上げた。何故か悟っているような顔をしている。

「あの、アユが、また？」

「そう。なんかあったらしくてね」

先生は多分亜夕がこのようになった理由を知っていると思うけど、あえてしらばづくれた。何故かは解らないけど、何となく白亜に何かを感じてほしい様子だった。

白亜は涙目になる。そして遂に大きな瞳に透明の涙を大粒流して声をあげて泣いた。その光景を俺と先生は見ている事しかなかった。

……数秒傍観していると、白亜が泣きながら亜夕のベッドの元に寄り、またそこで泣き始めた。

「ごめんなさいごめんなさい！ 白亜がバレンタインだからって恥ずかしがってなければアユは自分が嫌われてるって思う事は無かったのに。白亜ってば、アユの事知っておきながらああいう態度取っちゃって！ 白亜の馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！」

「……………」

ずっと俺は泣いている白亜を見ていた。傍観する事しかできなかったからだ。慰めようとも思わなかったし、「別に白亜の所為^{せい}じゃないよ」とすら声をかけてやろうとも思った。俺はこの事について割り込む権利は無いと思う。俺は亜夕の事を知らないし、知ってい

たとしても俺が入るような問題ではない。知っていなかったら尚権利は無い。……亜夕の事を知らないくせに知ってるような事を言ったりしていた俺には権利が無いから。

「なんか、ごめんね、蒼くん」

「謝るなよ。お前は悪くないだろ」

「……………」

あの後、長々と保健室に佇んでいた為、遅くなってしまった。遅くなると白亜の両親も兄さんも心配するだろうからという事で俺が家に送って行くという事になったのだ。

外はやっぱ暗い。もしも今が夏の夜だったらまだ少しは明るいと思うが今は冬。真っ暗では何も見えない状況だ。そのために俺はしっかりと白亜の横につき、見失わないようにする。

「……チヨコ、いつ渡せばいいかな」

白亜がふいに、そっと呟いた。軽く彼女の口から白い息が出たのがわかる。

「いつでもいいんじゃないかな。バレンタインじゃなくても白亜の気持ちは変わらないだろ。最もチヨコが腐んなきゃいいけどな」

「あは、は。そ、だね……」

何故か白亜は悲しそうだった。暗くて表情はよく見えないがとにかく、その台詞から悲しそうな顔をしていると悟れる。無理に笑っている。

俺は少ししゃがむような形で白亜を俺の方向に向きなおさせる。

「何？ 蒼くん」……無理に笑うなよな」

きょんとした様子の白亜はしゃがんでいる俺を見下ろした。電灯が丁度俺達を照らし、お互いの表情をわかりやすくした。……や

っぱり、白亜は苦い表情をしている。

「とにかく、無理に笑おうとすんなよ。あと、苦しいような表情もすんな。亜夕も悲しむし俺もそんなお前みてると辛いから」「でも、」「なんでもっ」

本人はどうも納得がいかないらしく、

「むー……」

「困った顔しても答えはでないぞ」

「じゃあ蒼くんは白亜にどんな表情をしてほしいの？」

「……………」俺はその質問には返答せず、立ち上がった白亜の手を握った。「……………はぐれるなよ、暗いからな」「蒼くん？」

「……白亜には、」ずっと「白亜らしい表情をしていてほしいんだよ」そう、亜夕も俺も思ってる。

「……………わかった」

白亜は童顔をコクンと下に動かし、頷いてから俺の手を強く握った。ちよつと汗ばんでいる。保健室の暖房少し暑かったよな。正直ききすぎだったし。

白亜を家まで送ってから、俺も自宅へ向かう。

白亜の家からウチまではそう遠くない。此処ここからだったら後は真っ直ぐの一本道を渡るだけだしその一本道は別に坂でもないから、辛くない。

ところで。

今俺は亜夕がどうなっているのか解らない。亜夕は先生によって自宅に送られているのかも解らないし、ひよつとしたら先生が病院に送ったかもしれない。それかまだ保健室に居るか。どちらにしろ亜夕には早く復活してほしかった。今はなんでか亜夕の鞆かはんアタックを久々にくらってみたい気分だし、亜夕にこき使われてみたくなっ

てる。Mかよ自分。

亜夕の事を考えながらふいに内ポケットのチョコレート（マイハニ―黒崎から）を取り出し、食べてみた。文句は無いけどやはり普通のチョコレートだった。美味いよ、普通に。

チョコレートを食べながらにまりしていると、ラッピングの袋の中に何か紙が入っているのがわかった。

「なんだ、コレ」

ガサツと開けて、そそくさと電灯の下に立ってその紙の内面を見ると、丁寧で綺麗な字で何か書かれていた。……ギャル文字じゃなくて内心めっちゃ嬉しい。

《蒼くんへっ！

いつの間にかバスケット大会が延長されているけれど、私はやる気満々だよ！ 三月に入っても練習頑張ろうね！ ところで、チョコレートの味はどうでしょうかつ？ 毒味して一応問題は無かったんだけど蒼くんの口に合うかどうか……。そういえば、四月、同じクラスだといいね。私達三学期くらいから詳しく知り合ったばかりだから四月からは白亜と亜夕くん達と勉強会やったりもできたらいねではではあ。また学校でね。よろしければチョコレートの感想をお聞かせくださいなっ》「ぬおお」

ラブレターではなかったが、十分嬉しい手紙だった。永久保存版だぜ。

朱音と俺のファースト××

バレンタインも普通に終わった。

白亜は多分バレンタインが終わっても亜夕あゆにチョコレートはくあをあげたい気持ちで山々だっただろうが、チョコレートをあげる相手・亜夕がもうすぐ終業式だったのに学校を休んでいるわけだからチョコレートをあげるとかそれ以前の問題は亜夕になる。

終業式はもうすぐ……というか終業式前日だよ、もう。

三年生を社会に送り出す前の儀式、卒業式の練習に俺達は参加させられるわけだからダルい。

三年生なんて一人一人覚えてないし送る言葉なんて思いつかない。帰宅部で先輩達と交流が無いからな。まあいいんだけど。

白亜はチョコレートを渡したがってる。

なのに、亜夕は全然来ない。この間の件で休んでいるのだろうか。

亜夕学校来ねー……、なんて思ってる内にもう今は終業式の日だ。いつも白亜と亜夕は一緒に学校に来るくせに亜夕は家でお休みだ。そのために俺は白亜と一緒に学校行こうと言われ、今白亜の家の前で待っているというところまで至る。

白亜はズバリ、用意が遅い。この間なんかはやつと出てきたと思つたらフリフリのパジャマ姿で登場して、「ごめんなさい！　まだなの！　すぐ終わるから待ってー」ときた。朝早く起きようね。

そして此処で待つてると、通学途中の学生達の冷たい視線もくらく。とくにカバンに白亜ファンクラブのプラカードをつけたりした奴に睨まれる。そいつらは白亜の家を知ってるからな、まだストーリーまでには至らないけど。

「どうして白亜さんの家の前にお前が居る」なんて顔。うげ、また睨まれた。

「ごめんなさい、蒼くん。おはよー」

後ろを振り返ると白亜が居た。よかった、パジャマじゃない。ちゃんといものツインテールで、制服を着ている。小さい背もいつも通り。童顔も。

「おはよう。ちゃんと眠れたのか？」

「あはは……うん、って言ったら嘘になるよー。ちよつと本読んだの」

「寝ろ」

小さな体の隣に立ち軽く呟き、歩き始めた。白亜は俺を見上げながら何かを話している。

「前にねー、アユに借りた本だったんだけど読むの忘れてて昨日読んだの。なんかねー、ふぁんたじい系だった。妖精とかが出てくるの」

「白亜が好きそうだな」

「あー、……でもなんかその妖精は実は悪い子で、主人公を食べちゃってエンド。最後らへんはやっぱアユの読みそうな本ってかんじだった」

「食ったのか」

白亜は屈託のない笑みで、「うん！」と返してきた。妖精が主人公を食べちゃう怖い話なんか読んじゃいけません。

白亜に変な本を読むなと軽く注意すると、急に高い声が後ろから

聞こえてきた。

「ふむふむ……ふあんたじい系かあ。私も読んでみようかな」

「あー、朱音ちゃんおはよう」

「おはよう、白亜。と、蒼くん」

「ぬあああああ、お、おはよう」

高い声の持ち主は黒崎朱音^{くろさき あかね}。肩に届くくらいのショートヘアは

小さな顔を軽く包みこんでいて、朝の太陽の光を反射できそうな笑顔を持つ俺の天使（エンジェル！）である。俺の初恋の相手。俺が密かに思いを寄せる相手なのだ。

「蒼くんワックス使うのかあ。ふむ、最近の男の子はオシャレですな」

「え、なんでワックス使ってるって……」

「臭いでわかったのー。だいじょぶだいじょぶ、先生に言う程私はイヤな子じゃないのよー」

ワックスは黒崎を好きになる前から使ってて、その、別に好きな女の子ができたからって使ってるわけじゃ、ない、から。

「白亜もねえ、寝癖を直す為にしゅっしゅってつけるスプレーつけてきたんだよ。なんか、パッションフルーツの香り」

「わあ、ほんとだー」

残念ながら俺はパッションフルーツの臭いをかげない。白亜のツインテールに手を出して「わあ良い香りー」なんて言ったら変態だから。「良い香りだぜ……！」なんて良いながら白い歯を出して親指をたてるのも無理。だが、春の風につてわずかに甘い臭いが……したかも。

なんてロマンチックな光景は無いよ。

「それよか、黒崎はその、部活の朝練とかは……」

「ああ、今はね、無いのー。本当は私も朝練があつたら行きたいけど終業式じゃない？」

うああ、トークのセレクトをミスしちゃったぜ。終業式なんだから無くて当たり前だろ自分。

「白亜も蒼くんも部活やってないんだつたらバスケット部来ない？ 二年生からでも私が優しく指導するよ」

……二年生といえば。

俺達、もうすぐで二年生なんだっけ。

今気付いた。一年生で、亜夕と白亜と騒ぎに騒ぎまくった結果二年生になるのだった。

なんだかんだで楽しかった気もすれば短かった気もする。……そんな俺の思考を悟ったように白亜は俺を見上げた。「もうすぐというか、終業式が終わって春休みが終わったら二年生なんだね」しみじみ。「クラスが一緒だといいね」

「蒼くんと私と、白亜と……亜夕くんも居れば、なあ」

「……………」

「……………」

「……………」

三点リーダーが沢山追加されていく。

途端に風がふいて、今の雰囲気より寂しくさせた。

この寂しさを水圧が潰すように、俺の心も潰す。そうだ、亜夕が居ない。きつとまだ家で安静にしている筈だ。^{はず}未だ亜夕自身の精神は安定していないから学校に来ていないのだろう。アイツ、二年生になっても来ないつもりかよ。

俺がボーっと亜夕の事を考えていると、黒崎が俺と白亜を交互に見つめるのを繰り返しながら、

「ごつ、ごめんねごめんね！ なんか私のせいで、折角^{せうかく}楽しかった空気が、……その、台無しになっちゃって！」

必死に謝り続ける黒崎に白亜は「朱音ちゃん、謝らないで」と言った。

校長の長い理解不能の話を聞き流した後、やけに軍歌っぽい校歌を歌い、春休みの生活上の注意と過ごし方も聞き流し、体育館から教室までバラバラで並んで帰ってきた。

その後、通知表をもらったが結果においてはスルー。後で父さんに怒られるかもね。怒られたら怒られたで「子供のお守り^もで忙しくて……」と空気を濁すつもりだ。いけない、更に怒られる。

先生からは特に話は無いという事なので、余りの時間は最後のクラスで仲良くという事でダベリタイムになった。予想通り白亜が「うりゃーっ」と飛びかかって甘えてきたために、俺は相手をしてやる事になった。黒崎……黒崎は残念ながら女子とお話中。

白亜は胡座^{あぐら}をかいている俺の足にちょこんと座って、ニコツと微笑んだ。

そんな白亜に俺は話しかけてやる事にする。

「俺と話すのもいいけどさあ、白亜、女子達と話したりしないのか？ ムサい俺と違ってじゅうぶん楽しいだろうし」

「蒼くんとお話のほう楽しいのー」

わーお、俺モテモテ。

「お話といっても俺トークセンスないしなあ」

「いーのー！」怒られた。そこで白亜は急に真面目な顔になり、俺の足から軽く降じる。「……一年間楽しかったね。蒼くんが私達の恋に協力してくれたし、アユと居るのも元々楽しかったけど、蒼くんが新しくお友達になってからもっと楽しくなったよ」「そうか？ よかった」「うん。白亜の第二のお兄ちゃん！」「ほほお」「だからね、二年生になってクラスが離れ離れになっても仲良くしようね、お兄ちゃん！」「……………」

「ごめん、俺ロリコンとかじゃないけど、……さすがに今のは鼻血出しそうだしっひえっふえっふえーい。妹最高！」

白亜に「お兄ちゃん」と呼ばれ浮かれていた俺は、黒崎に「話があるから体育館裏に来て」と言われた。なんだ、俺女子からの呼び出し多い。

でも今回の呼び出しの相手は黒崎だ。なんだ、体育館裏というシチュエーションは！ 男を興奮させる気かこの野郎！ 大体体育館裏というのは告白スポット！ うああ何言われるんだろ。

少し期待しつつ、どぎまぎしつつ俺は体育館裏に足を踏み出した。……まだ誰もいない。冷たい風が俺の体を被うようにしてふきかかる。

うおお、寒っ。とか思ってる内に声が聞こえたのはその刹那だった。

「あ、の、岩田先輩っ！」

……ん。

遠くから何やら声が聞こえる。岩田って確かサッカー部の三年の先輩だよな。ちなみに声は黒崎でもなければ聞きなれた白亜の高い愛らしい声でもなく……別の生徒だった。

ん、 možy.

「いつもいつも、岩田先輩がサッカーで頑張ってるところを見て、その、わたわた私、かっこいいなあって思ってた！」

うわうわうわおいおいおい。

生徒は俺の存在に気付かず続けていく。

「先輩の事が、こ、ここここ、ことが、」

おい！ かむな！ その調子だぞ、自分の気持ちを素直に、
「わっ」

腕を急に誰かに引っ張られ、俺はその腕を引っ張る奴の思うがままに移動される。グイグイと引っ張られ、あの、その、柔らかい物が。……腕を引っ張られてついた先は体育館裏に在る小さな暗い体育倉庫だった。こまみに校庭でよく使うライン引きの倉庫とも言っ

ていい。

倉庫の中にソイツと一緒に入り（というか入れられた）、ソイツは「しっ—！」と俺に忠告した。この声のあの柔らかい感触ともいい、女子だ。

「ごめんね蒼くん、此処、告白スポットだったみたい」

小さな声でそう呟いたのは黒崎だった。

「く、くろつ、さつ、きつ？」

「しーっ。告白の邪魔しちゃダメだぜボーイ！」

「す、すまない」

という事はあの柔らかい感触は黒崎の……と考えると急に心臓の動きが早くなるのがわかった。落ち着け自分。

暗くてよく見えない。だが黒崎の声はちゃんとわかる。彼女の首もとだけは光に照らされていて、白い首もとが強調されているようだった。

黒崎は扉を開けて出ようとしめない。だが外の様子を確認する為に耳を扉にあてる。微かに聞こえてくるのはさつきからかみまくっている台詞だった。この調子だと岩田先輩の事が好きなあの生徒は、「すきやき」とでも言ってしまうかもしれない。

静かすぎて、お互いの息が聞こえてくる。黒崎と俺の距離が近いためにたまにお互いの体があたる。

「……外に出られそうにないね。まだ告白してるう」

「あ、そ、そうだな」とつてつけたような返事をした。

「なあ、いつまでも待ってたら話を聞けなくなるんじゃないか？

此処には誰も来ないと思うし、どうせなら話今聞くんよ」

そういうと黒崎は「……うん」と声をもらした。その声が黒崎らしくなかったのを忘れない。

「……あのね、白亜、元気ないの。亜タくんがあんな風になった件についてま私^{すで}既に知ってるんだけど……。いつもの白亜じゃないの。今は無理してると思うんだけど、ボーっとしてるかんじ。元気づけ

てみてもただ『ありがとう』って言うだけで。小さな手と手をね、重ねて握るような感じで『ごめんなさい』ってずっと謝ってるの。……は、はくあ、悪くないのに、わ、たし、ちつとも悪くないよって言えなくて……最低だよ、わた、し」

表情は暗くてよく見えなかったが、きつと黒崎は泣いている。

黒崎を慰めた方がいいのかな、と迷っていれ内に、黒崎の頭がぼすんと俺の胸にのついた。

「……黒崎？」

黒崎は無言で俺の体に手を回してくる。柔らかくて細い腕が、俺の胴体に回った。

……あの、これ、夢ッスか？

神に問いかけたかった。がこれは喜んで良いのか悪いのか、リアルである。

「蒼くんは、白亜の事すぐ元気付けられるでしょう？ 羨ましいな」

「俺は、……ちつともだよ」

「そうかな……？」

「そうだよ。俺なんか全然」

「蒼くんはすごいよ。否定しないでいい。だけど私が全然なの。私、これで本当に白亜の友達だって言い張れるのかな？ 言い張って、いいのかな」

黒崎は上目遣いで俺を見上げる。そんな最中さなか空気を読まない俺の心の中はまさにフィーバー状態だったが、俺はこの場の空気を崩さないようにとりあえず微笑む。「言い張って良いんだよ。お前が友達だって思っていれば友達だよ」

「……ありがとう。でも私、弱いんだよ」
悲しそうに黒崎は微笑んだ。

そんな彼女の姿を見てしまった俺は、彼女を抱きしめずには居られなかった。元々抱きしめられていた俺だったので、俺はただ、黒崎に手を回して強くギュツとすればいいだけだ。有言実行というわけ、手を回す。

……細い。死んでる？　と思う程に細い腰だった。白亜よりはし
っかりしてるが。

「あの、ね。私また泣いちゃうかもしれないのっ」

「……ん？　あ、ああ」

「だから、だから」

刹那。

急に太陽はもっと光りだし、暗かった倉庫を少しだけ照らした。

お互いの表情、姿がよく見えた。

「だから、蒼くんに、」

黒崎朱音は躊躇しつつ言葉を紡いだ。

「ずっと傍に居てほしいの。今までも楽しくて笑っちゃうくらい傍
に居たけど、二人で、もっともつと笑えないかなって。私、蒼くん
の事、す、……な、なんていうか、他の男の子とは違う感情持つて
る。ただ少しの間そばに居て仲良くしてただけなのに……私、弱い」

その先の言葉を紡ぐ。

「好き。だから、私が泣いた時はまた今みたいに抱きしめて」

「……………」無言だったが、俺はすぐに頷いてまた彼女を抱きしめ
た。「蒼くん、相談にのってくれてありがとう。……あと、私の気
持ちもきいてくれて、ありがと、ね。あの、あまり気にしないでっ
！　私、ただ蒼くんに好きって言ったただけだしっ！　別に彼女にし
てくださいなんて、……………」

黒崎はまた静かになった。そして俺を見上げておねだりするよう
なかたちで、「彼女にしてください」と、紡いだ。

俺は言葉が出なかったのでとりあえず、少し体を低くして、……

……。

その先はわかるだろうから、以下、略。

朱音と俺のファースト××（後書き）

うわあああああああああ！

羞恥！ 羞恥！ 羞恥！ 羞恥！ 羞恥！

ラブシーン（しかもしつかりしたの）は初めてです。改めまして
苓北です。

ん？ 題名のファーストの次は何だって？ それは御想像にお任せします、恥ずかしいので。

早いですが朱音と蒼がゴールイン？ しました。やったね！ 本作で2カップル目です！ どれだけ趣味満載の物書いてるんですか私！

すみません……色々と。

それでは、早いですが次回でお会いできたらいいなと思っております。

次回では春休み編に入れたら入り、入れなかったら二年生編に入します。二年生編では更にキャラクター追加予定です。読んでくださっている方、お楽しみに。

春がきたぜ！ 始業式

「……黒崎が俺と付き合う事になった。即ち、黒崎は彼女すなわになった。あの時、俺達はあんなことをしてしまった。嬉しいけど、複雑だ。以上！」

その日、俺は俺にそう言い聞かせて春休み直前の日を終わらせた。

春休みの謙虚な過ごし方その1・交通安全に気をつけましょう。
クリアー。

春休みの謙虚な過ごし方その2・一学年の復習をしつつ、二学年での予習もし、しっかりと勉強に励みましょう。クリアーしていない。バツ。

春休みの謙虚な過ごし方その3・友達と外出したり、遊ぶ時は、春休みの謙虚な過ごし方その1を心がけよう。また、金銭トラブルには気をつけよう。出かける際には大金を持たないように心がけよう。……この間ゲーム買う為に軽く三万持っていたんだけどなあ。春休みの謙虚な過ごし方その4・生活面を気にしよう。もう、アウト。

高校にもなつてこんなもの熟読せなあかんのかい、とツツコミを入れたくなる程の春休みのしおりを通学用バッグに突っ込んだ。それも無理矢理。

そしてネクタイをしつかりと締めて、ブレザーを羽織る。

今からまあ始業式に向かうわけだ。春休みの件は一切無かった理由としては別にネタが無いわけではなく垂タが居なく、俺に命令する人が出なくなった為であり執筆には何の問題も無い。ただ冬休みのようにグータラに過ごしていた春休みは一気に終末を迎えだし、

特に何も無かった。

寧ろ始業式に行くのだと考えるととても嬉しい。

俺は、黒崎の事で頭がいっぱいだった。今正にその状態なために、俺は自分で頭をガスガスなぐる。だが心の中では、

「春到来だねっ」

こんなかんじ。

語尾に「」をつけてもよかった。黙れ自分。

「黙認黙認黙認！」

何が黙認なのかわからないがとりあえずそう呟いてから階段をおりて、リビングに出た。

母さんも父さんも居ない。折角の春休みだから休むと思ういきや仕事すると言って夜中まで仕事をしている。今日は朝までかよつきっぱなしにしていたテレビの画面をコンマ5秒眺めてから、ローファーを履いた。正直ローファーは嫌いだけど紐靴も面倒だから。

ドアノブに手をかけ、「行ってきます」と呟いて、春のにおいにする外にでた。

桜！ 桜！ 桜！

いやふー、桜だぜ、春満開のよ・か・ん？

そんな事は特に無い。

だが、俺の家の前の公園に咲いている桜は満開だった。勿論あんな思考はこなかったけど。

「二年生かあー……」

ばやいて、ガクツと肩を落とす。めんどくせえ。1年の面倒も。

まあ俺はしらないと思うけど、何より勉強が面倒くさい事この上ない。ただでさえ切羽詰まってるのに勉強なんてやってられるか。

頭をわしゃわしゃをかきむしって、門を出ると、小さな姿が見えた。

あのロリの水川白亜^{みずかわ はくあ}、ではなく、

「あああああつ!?!」

くろさき あかね
黒崎朱音だった。

黒崎は肩まで届くくらいの黒く艶やかな髪を春風に靡かせながら、屈託の無い微笑みで俺の方に振り返った。まあ、苦笑いと言ってもよかったけど。

俺と並ぶと俺の肩にやっと届くくらいの身長でローファアの音を彼女はならした。あ、歩いてきてる。こっちに。

「あ、えっと」

俺が顔を赤面させていると、黒崎が先に、

「おはよー、蒼^{そう}くん」

「ああ、……おはよう」

「さ、いこつ」

「あー、おう」

どうして黒崎が俺の家の門の前に居るのかよくわからなかったが、黒崎とあまりギクシャクしていない関係なので今はどうでもいい。黒崎が先に歩み出したので、俺は黒崎の隣に無言で並ぶ。

かつ、かつ、かつ、かつ。

かつぽかつぽかつぽかつぽ。

……………。

「……あのさ、黒崎」

「えっ、何？」

「ローファア、新しく変えたか？」

「なんでわかったの!?! ……もしやお主、エスパードだな!」

「違う違う! なんか音が俺と違うんだ。かつぽかつぽって。だから、新しいのを買ったんだけどサイズがでかくてそんな音がすんのかな、って」

「む、細かいよう」

「すまない」

「そんな真剣に謝らなくても」

黒崎は「くくく」微笑んで? から、また俺を見上げた。

黒崎の瞳が朝の太陽の光でキラリと光って、一瞬俺を眩しくさせる。

「私が蒼くんの家の前に立っていたこと、何も言わないの？」

直視できない程可愛らしい顔で俺を見る黒崎は、正に天使と言ってもよかった。

「別に何も言わないよ。……黒崎だから」

「……………」

何、この反応！

こちら特殊部隊！ 羞恥心というものがやってまいりました！

ああ、流行のあのミュージックと共に奴（羞恥心）が襲ってきた！ 繰り返す、こちら特殊部隊！ 羞恥心というものがやってきて……うぐあああああつ！

自分の言った事に後悔し、羞恥心を感じ、黒崎に助けをこう目で見えるがもう襲い。黒崎は啞然とした様子で俺を見て、「黒崎だから黒崎だから黒崎だから」と譫言ごわごわのように呟いていた。危険。

「ごめん、変な事言つて！」

「黒崎だから黒崎だから黒崎だから黒崎だから黒崎だから黒崎だから以下略」

「ぎゃああああつ！ ……まあ、自分で以下略って言ってるから正常だよな。黒崎、それはジョークだよな？」

「畜生、バレたかー」

黒崎は舌をペロツと出して、前を向いてタタターと歩み始めた。

その後を俺は微笑ましげにゆっくりとついていく。俺に前を向くようにして、後ろ歩きになった黒崎は何やら話し始めた。

「本当は白亜が来る筈だったんだけど、私が来たの。白亜がアユと一緒に来るんだーって。嬉しそうだったよ？」

「亜夕、もう学校に来れるのか！？」

「そうみたいだよ。よかったね」

俺は黒崎の一言をきき、安堵の溜息をついた。よかった。もう亜夕の奴学校に来れるのか。白亜もすげえ嬉しいだろうな。

「でもでも、二年生と言ったらクラス変え！」

「そう、なのか？」

「まあ聞いてよ。二年生になったらクラス変えじゃない？ あのちびっ子カップルが同じクラスになれるか……。私達も同じクラスになれるかな？」

「なれなかったらなれなかったで、ドンマイということだ」

俺は面白半分にそう言っただけで笑った。そんな俺を見て黒崎は、「ひどーい」と言っただけで白い頬を膨らませる。

「嘘だよ、嘘。同じクラスになれるといいな。亜夕と白亜とも」「うんっ！」

黒崎は前を向きなおした。それと同時に景色は桜の坂道になり、黒崎の後ろ姿を桜がより一層美しく包みこむ。その光景に俺は一瞬ドキッとしたが、すぐに顔を笑顔に戻し、黒崎についていく。

黒崎の少しデカイローファアの音と、俺のローファアの音と、風に桜の木がざわめく音。あとは後ろと前に居る登校中の生徒達の会話の声。その音がまるで音楽のようになって、俺の耳を通り抜けていく。

すると、黒崎が足を止めた。

足を止めた黒崎の方に歩みより、「どうした？」と声をかける。

「寂しくなっちゃうから。たまにはかまってね」

「……え？」

言うのが早いけど、

「すきありいつ！」

「んん！？ ん、ん！」

コンマ5秒後、俺達は離れた。

「さあ、行こーう！」

キスする時の立場が反対じゃねえか。

クラス変えの結果を発表しよう。

2 B・俺、黒崎・亜夕、白亜。

……おい。

4人一緒だなんてありえねえ。と、出席番号順の席のところに座り、クラス表を見てそう思った。まさか4人一緒だとは……、奇跡中の奇跡だ。まあクラス変えというのは成績や運動神経などのバランスで割り振られるから、たまたま俺達は都合良く割り振られたわけである。と、思う。

女子達は（中には黒崎も入る）同じクラスで良かったねーなどと騒ぎ、きゃいきゃい騒音を作りあげている。そんな女子達を見ていたらさつき黒崎と目が合った。黒崎の微笑みを受けてノックアウト。今はそのノックアウトからようやく立ち直った時である。

ふむ、まあ、いいでしょう。

クラス表を見て微笑んでから、中身の少ない鞆を横にかけていると、ドアが勢いよく開いた。

「な」

感嘆符はでなかったが、一文字言葉が漏れる。

「……亜夕……」

亜夕と白亜だった。

白亜はオドオドしながら2 Bの教室に踏み出す。長いツインテールをぴよこぴよこ揺らしながら微笑んで、俺に「おはよう蒼くん」と声をかけてきた。俺も「おはよう」と声をかけてから、また亜夕に視線を戻す。俺は立ち上がって、歩みより、亜夕を見下ろした。

「む。何だその目は」

亜夕を見下ろしながら、

「大丈夫なのか？」

「むう。変態ドスケベに心配される程オレはヤワじゃない」

何故か亜夕は童顔をにまーつと緩ませ、背伸びして俺の肩に手をやった。

「オレの事はどうでもいい。迷惑をかけたな。まあその、なんだ。ちよつと封印を解除してしまったような物だ」

「封印解除ってなんだよ！……お前、本当はまだ不安定なんだろう？　なのにそんなこと言つて、」「気にするな。それよりもオレと同じクラスになれた事を誇りに思え」

また亜夕はにまーつと微笑んだ。何故か機嫌がいい。

「そこ退^どけ。席につかせろ」

「お、おう」

俺が一步ひくと、亜夕は通りすがりにスラッと、

「お前にも春が来たそうだな。いやあ、よかったよかった」と、呟いたのだ。

……………

その場で硬直する。亜夕はそんな俺を気にせず出席番号順のドアの手前の席につき、「椅子が……」と呟いている。身椅子が二年生ようになったため、身長に合わないのだろう。

俺は用意をする亜夕の前に立ち、亜夕を見下ろした。

「なんで、知つてんだ？」

「にゅふふ。ワケあり」

「そのワケありのワケを教えてくださいな」

「……だあああつ！　朝っぱらからうるさいな、蒼！　折角機嫌良かったのに……。ちよつと朝の濃厚なキスを見ただけで、」「濃厚！？」　「ああ、ビックリしたぞ。さすがにオレと白亜もあんなのはしたことない」「ガキが濃厚とか言うなこのシヨタぐわあああああああああつ」「そつうなだれるな、別に公開しないぞ」

すると後ろから白亜がやってきた。

白亜は頬を赤く染めて、

「ははは、白亜も、ビックリしたよ！　あんな、のーこーなの……ぼっ」

「ぽつ。じゃない！ ぽつ。じゃないよ！」

「まさか二人がそんな進展していたなんて白亜予想外だったよう」

「なんだ白亜、知ってたのか」

「あ、アユはお休みしてたから知らなかったよね！ 終業式ものこーだったよう」

「どういう事だ、アオ」

亜夕は目を輝かせて俺に問いかけてくるが、そこはノーコメントで。マスコミに追いかけられる芸能人みたいな気分になりつつ、俺は「ノーコメントで……」と呟いた。

すると白亜は歌い出す。

「はーるがきーたーはーるがきーたーどーこーにーきたー」

「「そーうにきーたーそーうにきーたーつーいーにーきたー」」

「歌うな！ しかも2人でハモるな！ なんだよついにきたって！」

まあ、いいや。楽しいから。

謎の転校生、龍ヶ崎黒姫・白姫

朝の、HRが始まった。

「えーと、皆さん、おはようございます。進級おめでとう。また先生とも一年間よろしくね」

今年も見事に、独身の神楽坂先生かぐらざかだった。今日はなんだか純白のスーツを着ていて、なんともまあ、美人の先生に合っているスーッだった。

先生が今日の流れを説明しているのを無視して、俺は亜夕の方をみる。にやーと笑われた。嘲笑だ。無視した。むすーとされた。

……俺的にはこの間の件もあり心配したつもりだったのだが、それを見事にスルーされる。心配してやってんのに。

白亜は、さっき配られたプリントに熱心に落書きしていた。この頃白亜はお絵かきにハマっているらしい。この間なんかはメールで「お絵かき楽しいねー」なんて言っていたし。

黒崎は……黒崎は、しっかりと先生の話聞いていた。時折、女子に目配せされ、それに対応するだけであとはしゃんとしているもの凄く礼儀正しい。二年生になり、黒崎のスカートは少し短くなっていた気がしたが、それは本人がスカートを短くしているのかあるいは背が伸びたのか。どちらかはわからないが女の子らしくなっている気がする。

俺のキモい想像を打ち消すように、先生が俺の方を見た。「アオくん」ぱつん。「先生のお話、聞いていましたか？」ぱつぱつ。「聞かないとダメですよー」ぱつぱつぱつ。

プリントの束で俺の頭を軽く叩いた先生は、新たな話を始める。

「今日は、二年生ということで、転校生が来ます。というか来ました。少々ベタな展開ですが、許してね。もうドアのところで転校

生が待っているというところでベタですけどそうほうが転校生さんもやりやすいでしょうし」

転校生？ 転校生、かあ。

「はーん」といったかんじで、人差し指で机をこつこつと軽くノックしながら転校生さんが来るのを待つ。実に三十回目くらいのノックで先生はその謎の転校生さんに「いいですよー、どうぞー」と声をかけた。

静寂に包まれた空気の中、ドアが勢いよく開いた。

がらがらばきっ！ という具合に。ん、ばき？ どうやらドアが外れたらしいが、先生がドアを直し、転校生さんは自己紹介をしようとする。おい。

「……龍ヶ崎黒姫。趣味はスポーツ系。姉の龍ヶ崎白姫とは双子だ。色々と迷惑をかけてしまいかもしれないが、仲良くしてもらいたい以上」

某無自覚神様のように「以上」と付け加えた龍ヶ崎は、俺を鋭い眼差しで見つめてきた。多分、睨んでいるわけではなくそういう目つきなのかもしれない……。

ちなみに。名前で女子の侍系キャラクターを想像した人が大半だと思うが、龍ヶ崎は『男』だった。これには多々なる意味で血が凍る。名前が、『龍ヶ崎黒姫』。顔は女子のように美しい顔立ちだったが、凛々しさと、よく通るモテそうな声は男だった。声優をやったら売れると思う。背は残念なことに俺より高い。侍系か。黒い艶やかな肩より少し上くらいの髪はサラサラしてそうで、テニスコートの上でその髪が舞っている様子を想像すると実に好青年。こりゃあ女子にモテモテの人気者だ。

「龍ヶ崎くんは、アオくんの後ろね。ちょうど田中くんが転校したし……アオくんの後ろの席だけ開いていたから、そこね」

俺の後ろかよ。ていうか、田中って転校したのか。

田中ってどんな奴だったっけ？ と、想像していると、龍ヶ崎が「わかりました」とその男子のくせに綺麗な顔で先生に応答し、俺

の後ろに座る。その間に女子がキヤーキヤーうるさかったが、気にしないことにした。

龍ヶ崎のこともあまり気にしないことにする。

高嶺の花というの意味が違ってくるが、ああいう爽やか系とは世界が違うし。

あれから、朝会にでて校長の長ったらしい話をきき、龍ヶ崎の紹介をしていた。黒姫の方の紹介は見たが、……迂闊^{うかつ}だった、姉の白姫さんとやらは見ていない。だから、描写できない。

で、今は、帰りの用意をして、し終わった人から帰りましょうということになったわけだ。どうやら先生たちは入学式のこと忙しいらしい。頑張れ。

「アオ、帰るぞ」

亜夕はもう帰宅の用意を済ませたらしく、白亜をつれて俺に早く用意をしろとせまる。

「ああ、ちょうど今終わったし、……んじゃ、帰るか!」

白亜の頭をポンポンと軽く叩いて、三人で下校しようとした。ちなみに黒崎は他の女子と下校。

廊下に足を踏み入れた、その時。

「お前が、龍ヶ崎の前の席の蒼^{そう}という奴か」

えっ、と思つて、後ろを向いた。

龍ヶ崎が居た。どうやらこいつの一人称はおかしなことに自分の苗字らしい。

無視して、また下校しようとした。襟を後ろからひっぱられた。

「な、何やって、」「龍ヶ崎のところに来い！ でなければ、お前の首はふつとぶぞ！」「いつの時代じゃアホ」「来い」「うぐあー」ずるずると引つ張られる俺を見て、ロリとシヨタは「先に帰ってる」と言い残して去っていった。待てよ、助けるよ！

「し、ぬ！ ぐるじい」

俺を無視して龍ヶ崎は男子トイレに連れ込む。凄まじい力だ。

男子トイレの水色のドアを龍ヶ崎は片手でがらつと開け、俺を放り込み、自分も入る。そして内側の鍵をかけて誰も入ってこれないようにした。なにやってんの。

「お前、何のつもりだよ！」

久々に本気でぶちぎれて、その場にへたれこみ、龍ヶ崎を見上げた。まだ喉が苦しかったために、げぼげぼと嘔^むせる。

「何って、……まあ、用があっただけだ」ふつうの顔をして答えた爽やかくんは俺を見下ろす。「用がある以外にどうして此処につれこむのだ」

「あんな力づくで此処に連れ込まなくてもいいだろ」

「力づくでないと、いけないのだ！」

龍ヶ崎がいきなりキレ始めた。

「ちょ、まてまて、何故にキレル」

「……お前と、その、あの、……水川白亜と、大神亜夕は、あの、どういふ関係だ？」

「え」

返答に困る。龍ヶ崎ははあはあと怒りのために息をきらしながら、「噂によると、お前はあの二人を虐めているときいた！ そしてお前がとてつもなく強いと聞いた！ だからこの龍ヶ崎はお前を成敗するために無理矢理此処につれてきたのだ！ ……許せない、よくも二人を……」

「ばか、まてよ」

龍ヶ崎は自分の背中に手をのばす。そして、俺の鼻あたりに近付けた物を見て、俺はビクツと肩を震わせる。

正気か、コイツ。

竹刀を構えて俺のところにじわじわとよってくる龍ヶ崎は、何やら話し始めた。「あの二人は保護せねばいけない対象なのだ。だから龍ヶ崎が保護をする。このような、汚い男に虐められていたとは」「汚いつてなんだ」

「お前のその寝癖かわざとかわからない髪型！ 汚い！ 実に汚らわしい！ しかも、あの二人を虐めて……何故虐める！ 何故フラグをたてずに……！」

「いやあの、虐めてませんし、あの、誤解ですし……フラグ？」

「そんなハーレムの中、お前という奴は……あ、ちなみにフラグという単語はググればいい。ゲームの単語だ」

「はあ……」

意味の分からない言葉が飛んてくる。

「はっ！ しまった！ また、このような単語を使って会話してしまった。なんたる不覚！ くそおおおお！」

「ばかやめ、ちょ、竹刀をトイレの中でふりまわすなよ！ ……あびぶるわあああああああつ！？」

龍ヶ崎がついにキレて、振り回した竹刀が俺の顔面に突き刺さるようにあたる。痛い。

「不覚だあああああ！」

「しるかバカやろぐぼあらごべばるあああああああああ！」

俺、ともに話せてない。というか台詞をすべて言う前に龍ヶ崎に竹刀でポコポコにされているような気が。

「うっう！ うわあああああ！」

「だからおちつおぼあがうぐけぼあばあああああああ！」 ぱん！
「おぶっ」 ぱん！ 「あべしっ」 ぱんぱん！ 「おばまつ」 ぱんぱんぱん！ 「ばらくっ！」

頭を竹刀で殴られているような気がする。何故描写が曖昧なのか

と言うと、意識が朦朧もうろうとして何かなんだかわからないのだ。

俺が「あびやびや」と呻いて、このまま龍ヶ崎に殺されるのか……と、悟った刹那。何かかが壊れる音がして、いきなり男子トイレのドアが開いた。

奇跡だ。

「……な、」とりあえず、一言言ってみる。

すると龍ヶ崎は竹刀を持ったままドアを開いた方をみて、何か言った。

「姉様！」

……少女、だった。

薄い茶色の長い腰まで届く髪はどこから差し込む日光の光をあびて更に美しく艶やかに輝いた。美しい、おっとりとした顔立ちをしている。こちらの様子を見た。

「黒姫の声がしたので、様子を見に来たのですよー。そうしたら、何か喧嘩しているようでしたので、私が鍵を開けましたー」

「その細い小さい手で!？」

思わずつつこんだ。その小さい白い手が鍵をぶちこわしてドアを開けるのか？ 男でも無理だぞ……。おっとりとした喋り方をしているが、まさかそんな彼女にそのような力があるとは。

「黒姫、やめましよう。転入早々、見苦しいですよー」

「す、すみません」

黒姫は俺の首元に突きつけていた竹刀を下ろす。

それを見て安心した少女は俺の姿を見た。視線変更。

「はじめましてー、この度転校してきた龍ヶ崎りゅうがさき白姫しろひめ」と申します、以後、お見知りおきを」

「あ、はい」

「こちらの男子は、私の弟わたくし、龍ヶ崎黒姫ですー。多分HRでもう自己紹介をしたと思いますがー……一応、私の弟ですのー」

「はい、はい」

「では、私はこのへんで失礼しますねー。茶道部に入部しようと思っ
っているの、先生にご挨拶しなければいけないのです。では、喧
嘩せずにー」 ドアを閉めて、白姫さんは立ち去っていった。

うーん、実に美しい方だ。

黒姫はおずおずとしながら俺を見た。「……すまない。これ以上
は、何もしない。姉様にああ言われてしまった。姉様の言うことは
絶対だから……」

そう言っ、龍ヶ崎は一步步歩いて戻ろうとした。
が。

「龍ヶ崎、何か、落ちたぞ？」

謎の転校生、龍ヶ崎黒姫・白姫（後書き）

こんにちは。駿河です。

今回は、転校生のお話をお送りします。黒姫と白姫です。

そうそう、そういえば、とある友達に「作家風にあとがきをかいてみてー」と言われたので（リクエストなのか？）、書いてみます。それでは、私の末期についてお話したいと思います。

とある友達とは別に、男子の友達もまあまあ沢山いるのですが、そのうちの男子とほのぼのと外を見ていました。深い意味はないです。当たり前です！

雨がさっきまでふっていたのですが、もう大分止んでいました。そこでその男子が、

名も無き男子「雨止んでるから外でようかな」

駿河「え、ええっ!？」

名も無き男子「え、何？」

駿河「今ヤンデレって聞こえた!」

名も無き男子「……逝け!」

そんな感じです。実につまらない話ですが、それと同時に実に私の腐っている『腐度』を物語っています。

では亜夕のお話です。

亜夕のお話と言いましても、亜夕のモデルのお話です。

亜夕にはモデルがいて、まあとても私が溺愛している可愛い

シヨタなのです。可愛いです。わーい、私変態！

駿河 「シヨタは、素晴らしい」

亜タモデル 「シヨタってなに？」

駿河 「え。知らないの？」

知らなくて当たり前です。

その後、ちゃんと説明してあげました。

亜タモデル 「へえ、そうなんだ。まあ、俺は可愛いし当然と言ったところか」

駿河 「そんなナルシストなところも愛してる！」

亜タに似てます。

ちなみに、亜タモデルにこの間消しゴムを借りました。筆記用具を忘れたので。そうしたら、消しゴムに何か書いてあったのです…

…！

「ん、これは」

発見してしまいました。なんと亜タモデルの消しゴムには「神」という単語が記されてありました。

駿河 「ねえ、この、神って何？」

亜タモデル 「神だから」

駿河 「へ？」

亜タモデル 「俺が神なのー！」

駿河 「あ、ああ！ シヨタ！」

意味がわかりません。では、今後あとがきにて彼の話をするときには彼の名前は神消しゴムにしておきますね。

謝辞です。

ここまでスクロールしてくださった方、ありがとうございます！
そして一文字一文字丁寧に読んでくださった方も居たら光栄です。
誤字脱字の報告も随時受け付けております。日本語のおかしい

ところとかの指摘も。

次回は黒姫の謎に迫っていきます。
ではー！

龍ヶ崎黒姫の秘密

「な、なななな」

龍ヶ崎が口をパクパクさせているので、仕方なく俺が拾ってやることにした。そうじゃないと汚れちまう。仮にも此処はあの、ほら、男子が用を足す場ですから。

落ちてんのは……、「ん、同人誌？」同人誌だった。アニメは大抵理解しているがオタクという程でもないという曖昧な俺は、同人誌の表紙のキャラクターを知っていた。表紙に描かれているのはこまみに二人で、どちらとも女キャラクター。白亜のような典型的口リである。

「百合^{ゆり}？」

「うぎゃあ！ やめて！ 拾わなくていいから！」

急に口調が変わり、龍ヶ崎はあたふたしだした。

手をバタつかせている龍ヶ崎から、また何かが落ちた。

「む、これは……あのアニメのフィギュアか。イベントでしか手に入らないものなんじゃないか？ む、また落ちたぞ。こっちは同人のグッズ、」「わああ！ もう、もうやめい！ 拾わなくていいし！ ぶっちゃけ俺そういう無理矢理人の拾って返すフリして人のモンちら見する人嫌いだから！」「ふむ、口調が変わってますな。日本語が曖昧だぞ」「だああああうるさい！ 返せ！」

んつ、と、掌を俺に差し出してよこせサインを出してきた。俺は百合ものの同人誌とフィギュアと同人グッズを返す。

「お前、アッチ系の奴だったのか」

「……………」

キッパリと言うと龍ヶ崎ま黙りこくってしまった。「ごめん」

「い、いや、別にいいのだ。龍ヶ崎の不覚だった。ちなみにそれは龍ヶ崎の同人誌だ。同人グッズも龍ヶ崎のものだ」

ぶいっと、すねたようにそっぽを無垢龍ヶ崎はそう言った。自分

の、同人誌？ そりゃあ自分の同人誌だろうに。

「これは自分で作ったものなのだ。貴様にはわからないだろうが龍ヶ崎はそこそこ売れている同人サークルに所属しているのだぞ」

「……まあ、それはわかった。けどなんで学校にそんなモン持ってきてんだよ」

「悪いか？」

「悪くないですすみません」

ものすごい顔で睨まれたら謝るしかない。すみません。

龍ヶ崎黒姫との約束

ふう、と何事も無かったかのように俺は立ち上がって、黒姫を見る。

「……わーお、」なんたる暗い顔。

秘密がバレてしまった事を非常に気にしているらしく、ドンヨリとしていた。下に俯いている様子は今にも地面にの字を書きながら「どうせどうせ……」と言いそうな予感が漂う。そんな黒姫に近寄り、声をかけてやろうとする。が、

「この事を誰にも言うなよ！ 言ったらお前はあの世いきになる！
みすかわ はくあ おおかみ あゆう 水川白亜や大神亜夕に言うような事をしたら尚更だ。命は無いと思え。あ、あと、姉上にもあまり言ってほしくない」

姉上。黒姫の姉とは、龍ヶ崎白姫だ。じまづがねきいていあのロングヘアーのべつぴんさんである。優しい笑顔を振りまく、茶道部が華道部が忘れたが『いかにも』ああいうお方だ。いや俺は一回しか見てないけど。

「姉さんって、双子の龍ヶ崎白姫だろ？ ……きょうだい姉弟のくせにあの事言ってないのか？」

すると黒姫は顎をあごゆつくり引いて、

「当たり前だ。お前、姉上を見くびってはいないか？ 姉上は真剣でまがった物が嫌いなのだ。この俺、龍ヶ崎がアニメや漫画や同人誌などといういかがわしい物を好きだと知ったら……龍ヶ崎はあの世逝きになる。それが木刀や竹刀で殺される」

そんなに恐ろしい人なのか。

「姉上は剣道、柔道、空手、華道、茶道、フェンシング、ボクシング、……まあエトセトラにしておくが、とても有力な方なのだ。姉上が曲がった事が大嫌いな為にはいけないという理由もあるが、それだけではない。有力で、龍ヶ崎が慕うべく姉上……実際尊敬もしているし、龍ヶ崎は姉上に憧れている。だから姉上を裏切るような事はしたくない」

もう既に裏切っていると思うんだが。

「だから姉上には言わないでくれ！ 頼む！ ロリとシヨタにも嫌われたくないんだ！」

「いや、ロリガールとシヨタボーイとはお前あまり交流がないだろうし、」「何言ってるんだ。第一印象が大切なんだぞ。第一印象で全てが変わる。それ龍ヶ崎は大神亜夕、いや大神亜夕様に一生ついていきたいと思ってるのだ。あっち系の意味ではなくてだな」黒姫は目を輝かせながら力説を続ける。「僕として扱われてでもいい、龍ヶ崎はあのお方のそばに居たいのだ。そしてお前より上だということを実証したい」

ついに黒姫は俺の襟をつかみ、顔をグイッと寄せる。唾を大いに飛ばしながら更に力説。

「お前が二人をいじめていないという事はわかった。だがしかし、お前はこれから龍ヶ崎の良きライバルとなるだろう」

「えっと、言ってる事がよくわからないのだが……」

「ということでお前と龍ヶ崎はこれから勝負するのだ！ ふはは、当然龍ヶ崎の勝利に決まっているだろうがな、お前が良きライバルになったのなら仕方がない。明日の朝からが勝負だ」

いやいやまてまて、何故そうなってるんだ。

一度整理しようとして、俺は目を輝かせている黒姫から目線をそらす。そして脳内で今まで在った事を整理する。

えっと、黒姫の『あのこと』を龍ヶ崎白姫にバラしてはいけない（もしバラしたら簡単に言えば死刑）、ロリとシヨタのお二人様にもそのことをいってはいけない（こちらも二人にいったら死刑になる）、あと何故か俺たちは良きライバルになっているから明日の朝から勝負を開始する……

ちよっと待て。

俺は、黒姫が俺の襟を掴む手を無理矢理外す。以外とパツと黒姫の手は外れた。そのまま黒姫を見て、問いかける。

「勝負って何をするんだ」

すると黒姫は待つてましたと言いそうな体制で（即ち腰に手をあてて「えっへん！」と胸をそらすポーズ）俺を見てブイサインをする。指が細い。

「待つてました！」やっぱり言った。

「内容は簡単だ。バカなお前でもすぐわかるだろう。要するに、水川白亜と大神亜夕を『慕えば』いいのだ。それで、実際どっちが役にたったか本人に訊く。本人に訊いて、『が役にたった』などと答えれば役にたったほうが勝利。負けたほうは切腹を命ずる」

「待て！　なんでお前の発言はこう危険なんだ！　切腹つーのはなあ、結構前に禁止が出てるし法律でもやっちゃいけない事になつてんだよ！　切腹つーのは、自殺とワケが違う。とにかく切腹はダメだ」

黒姫は頬をふくらませた。

「仕方がない。今回だけだからな」
何が。

「では、明日の朝からが勝負だ。負けたほうの罰は龍ヶ崎が考えておく。ではまた明日会おう。さらばだ」

何処のヒーローだ。

黒姫はキリリとしたいつものかっこいい顔をして男子トイレから出ていった。そういやあ此処は男子トイレだったんだっけか……。

黒姫が出ていったので、俺も帰る事にした。男子トイレの洋式便所のドアの前に物悲しく置かれたカバンを哀れに思わなかったが、カバンを持ち、とりあえず外に出る。

あ、家の鍵教室に置きっぱなしかもしれない。きっと机の中だ。ふと思ったのは、俺が鍵をポケットにしまって教室を出た記憶が無いからである。今日は母さんが家に居ないし、取りにいかないといけない。そうしないと家に入れないまま一人でドアの前にポツンと……それはダメだ。ゲームも勉強もできないから。

「取りにいくかあ」

溜息をついてから、男子トイレ付近の教室に向かう。

龍ヶ崎黒姫との約束（後書き）

あつ、もうすぐで20000アクセスだ……！ 全角数字にする
とすごくスペースを使った気分になります。駿河は心が狭いのです。
改めてこんにちは、駿河です。今回は黒姫編が始まったというか
…… あ、黒姫編ではなくて『龍ヶ崎編』かもです。予告編としては、
白姫のお話です、次回は。

予想がついている方がいるかもしれませんが、意外な彼女の秘密
が明らかになります。

そして冒頭で呟いてみましたが、アクセス数が20000突破で
す。スペースを使っている気がするのですがあえて全角数字でいき
ます。20000です！

此処、小説家になろう様でお書きになられている私よりもずっと
上手くて、小説が人気の方は「20000くらいで喜んでるんじゃない
ねえよ素人が」というかんじかもしれませんが、とても嬉しいので
す。何せブログよりアクセス数が高いですから。当たり前ですけど
も（ちなみにブログは去年の8月に始め、この小説は11月に始め
ました。小説の方がアクセス数高いだなんてなんたる幸せ）。ちな
みにブログはまだまだ5000です。

20000アクセス突破できたのはクリックだけでもしてくれた
方々と、そしてこんな駄文でも読んでくださった方々のおかげです。
そしてこの素敵なオンライン小説サイト、小説家になろう様のおか
げでもあります。ありがとうございます。

最後に、ここまでスクロールしてくださったあなた（もしいたら）
ありがとうございました。次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4779f/>

ロリショタ！ ～私立萌葱学園萌えルート～

2010年10月8日14時39分発行